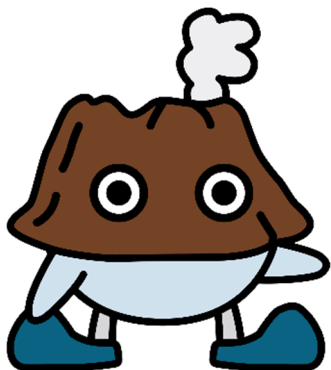


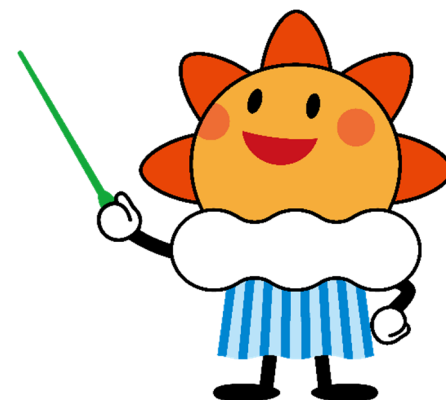
向こう3か月の 天候の見通し

3か月予報（8～10月）

福岡管区気象台 気象防災部予報課
（令和8年7月21日14時発表）



ぼるけん



はれるん

8～10月の予報のポイントと留意点

予報のポイント

- 向こう3か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、**平年並**か**高い**でしょう。

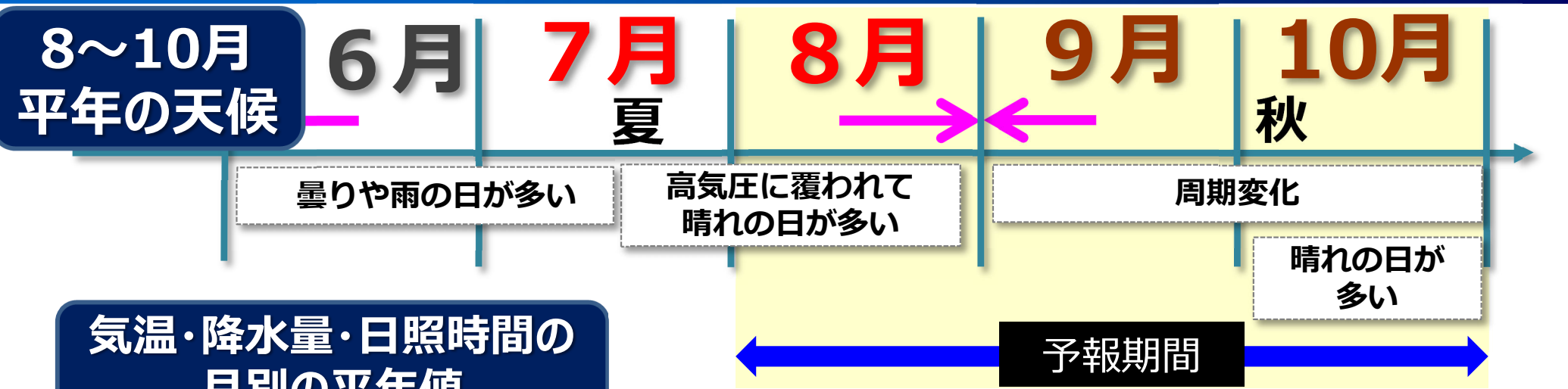
留意していただきたいこと

- 8月は**高温**の予報。
- 梅雨明け以降、気温がかなり高い状態が続いています。**これから8月上旬までは、気温が1年を通して最も高い時期**ですので、**熱中症の危険性が高い状態が続きます**。屋外での活動等では飲料水や日陰を十分に確保するなど**熱中症対策**を行い、**健康管理に注意**してください。また、農作物や家畜の管理等にも注意してください。

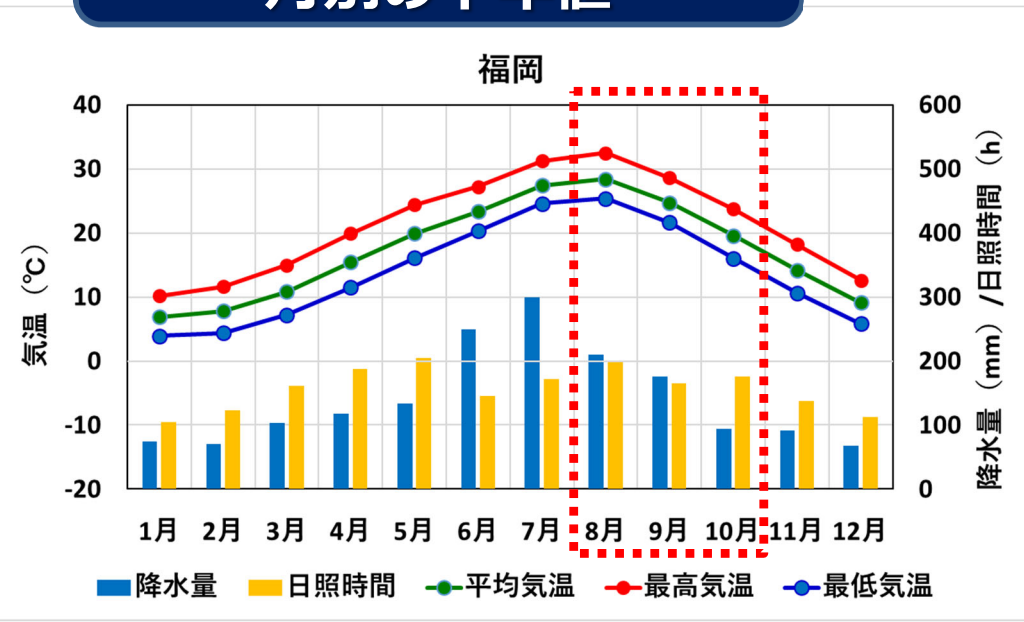
- **降水量**は**ほぼ平年並**の予報。
- **台風や秋雨の時期**であり、**近年は大雨の発生頻度が増加**しています。**最新の気象情報等を活用**いただき、**大雨・台風への備え**をお願いします。



8～10月の九州北部地方の平年の天候経過



気温・降水量・日照時間の月別の平年値



8～10月のポイント

- ・ 気温が最も高い8月を含む
- ・ 台風の発生数が一番多い (平年の接近数は約3個)

表 台風の発生及び上陸数 (平年値)

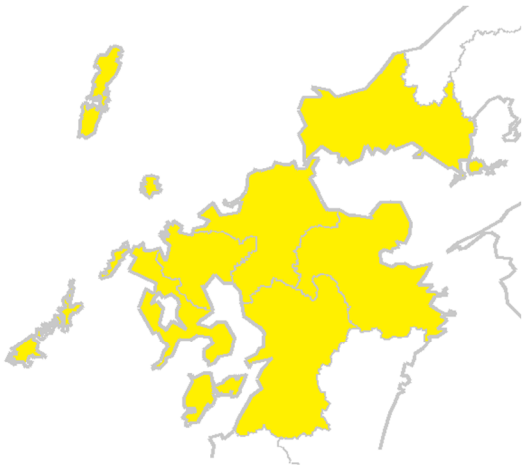
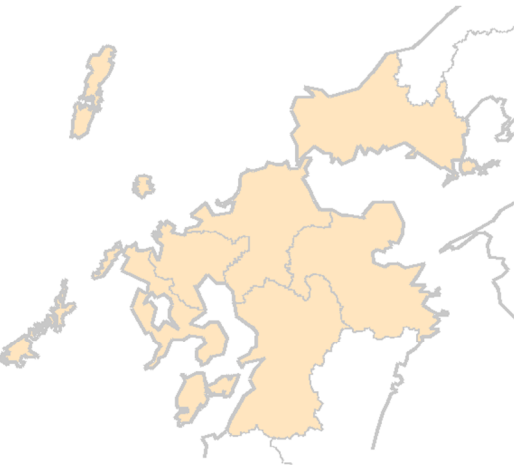
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
発生数	0.3	0.3	0.3	0.6	1.0	1.7	3.7	5.7	5.0	3.4	2.2	1.0	25.1
日本上陸数					0.0	0.2	0.6	0.9	1.0	0.3			3.0
九州北部地方 接近数				0.0	0.1	0.3	0.8	1.1	1.1	0.4			3.8

九州北部地方の天候の特徴
https://www.data.jma.go.jp/cpd/j_climate/kyuhoku/main.html

台風の統計資料
<https://www.data.jma.go.jp/yoho/typhoon/statistics/index.html>

天候の見通し（8～10月）

向こう3か月（8～10月）の平均気温・降水量

九州北部地方 (山口県を含む)	 平均気温（3か月） 8 ～ 10 月	 降水量（3か月） 8 ～ 10 月
(山口県を含む)	低 20 並 40 高 40 平年並 か 高い 見込み	少 40 並 30 多 30 ほぼ平年並 の見込み
 数値は予想される 出現確率です	 高い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 - 平年並 低い確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上	 多い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 - 平年並 少ない確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上

天候の見通し（月別）

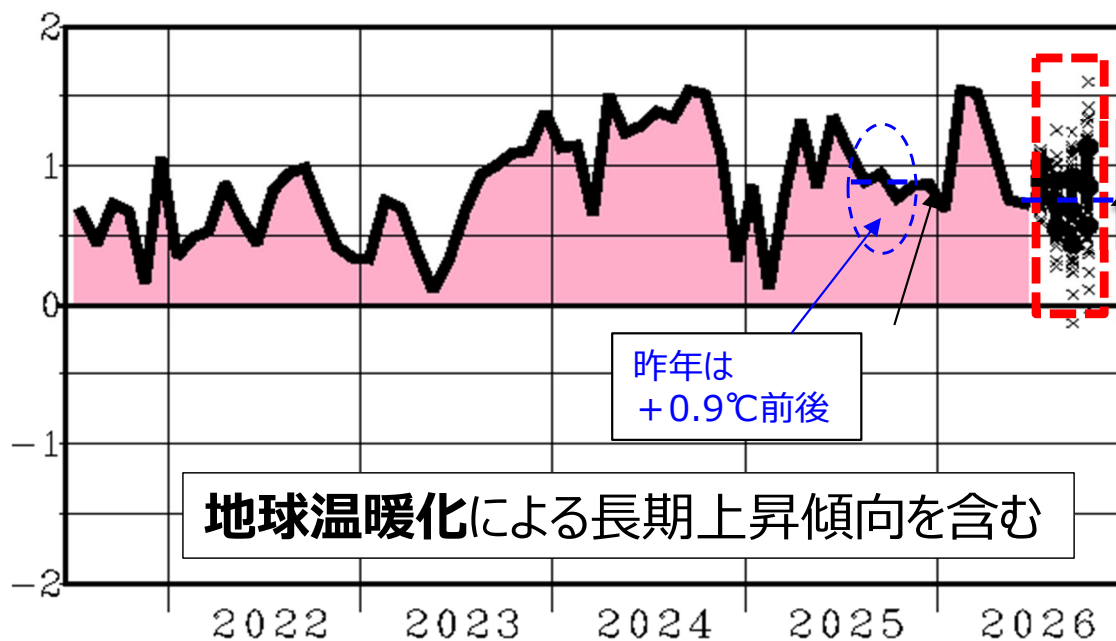
	8 月	9 月	10 月	気温
天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わるでしょう。	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	
気温	低 10 並 40 高 50 高い 見込み	低 30 並 40 高 30 ほぼ平年並 の見込み	低 20 並 40 高 40 平年並 か 高い 見込み	高い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 平年並 低い確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上
降水量	少 30 並 40 多 30 ほぼ平年並 の見込み	少 40 並 30 多 30 ほぼ平年並 の見込み	少 30 並 40 多 30 ほぼ平年並 の見込み	多い確率 70%以上 60% 50% 40% (20:40:40) 40% (30:30:40) 平年並 平年並 少ない確率 40% (40:30:30) 40% (40:40:20) 50% 60% 70%以上

8月の気温を低温側へ変更：フィリピン付近の対流活動が弱まり、暖かい空気に覆われやすい傾向がやや弱まったため

8～9月の降水量を少雨側へ変更：湿った空気の影響をやや受けにくい予想となったため

大気全体の温度の予測

北半球中緯度の大気の温度は**高い**状態が続く。



北半球中緯度の大気の温度の解析値と予測
対流圏（高さ約1,500～10,000m）の温度の平年差



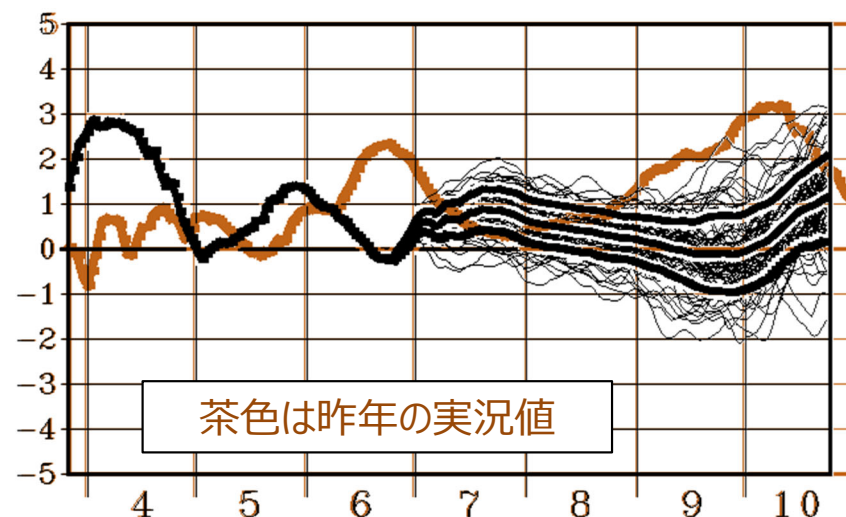
夏のうちは高温に注意。
エルニーニョ現象の発達に伴い、熱帯を中心に対流圏が昇温していく

+0.8℃程度

（北半球全体は+0.9℃程度）

エルニーニョ現象の発達により昇温傾向

西日本の上空約1,500m付近の
気温平年差

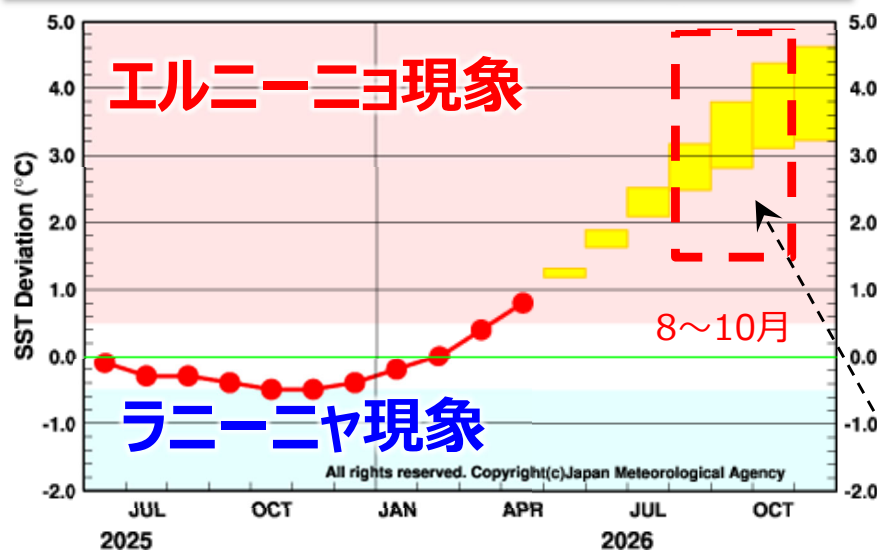


- ✓ 昨年は9月の気温がかなり高かったが今年は平年程度。
- ✓ 10月後半から気温が上昇する傾向

熱帯域の海面水温の予測

2026年春から**エルニーニョ現象**が発生しているとみられる。
今後、秋にかけて**エルニーニョ現象**が続く見込み（100%）。

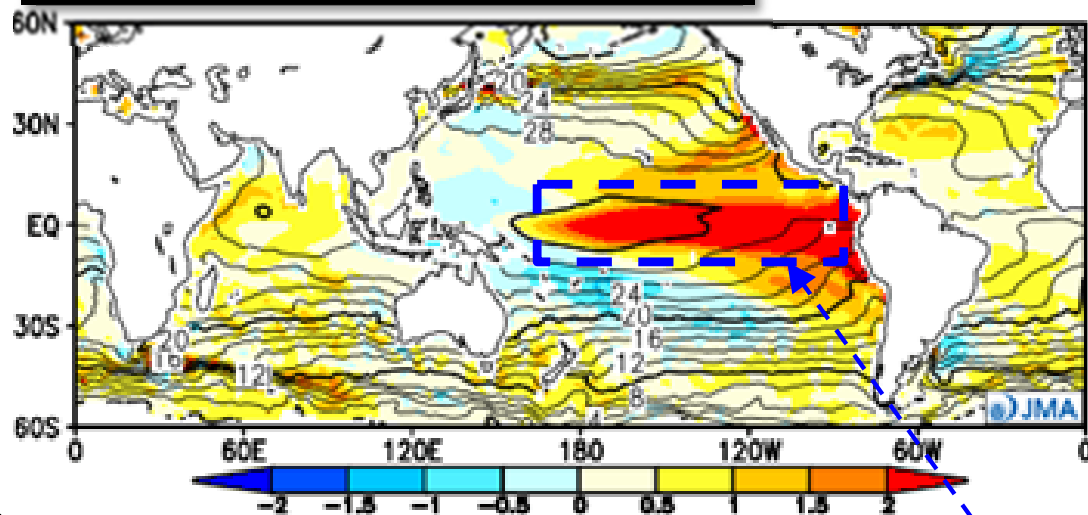
エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値の差



エルニーニョ監視速報 URL :

https://www.data.jma.go.jp/cpd/elnino/kanshi_joho/kanshi_joho1.html

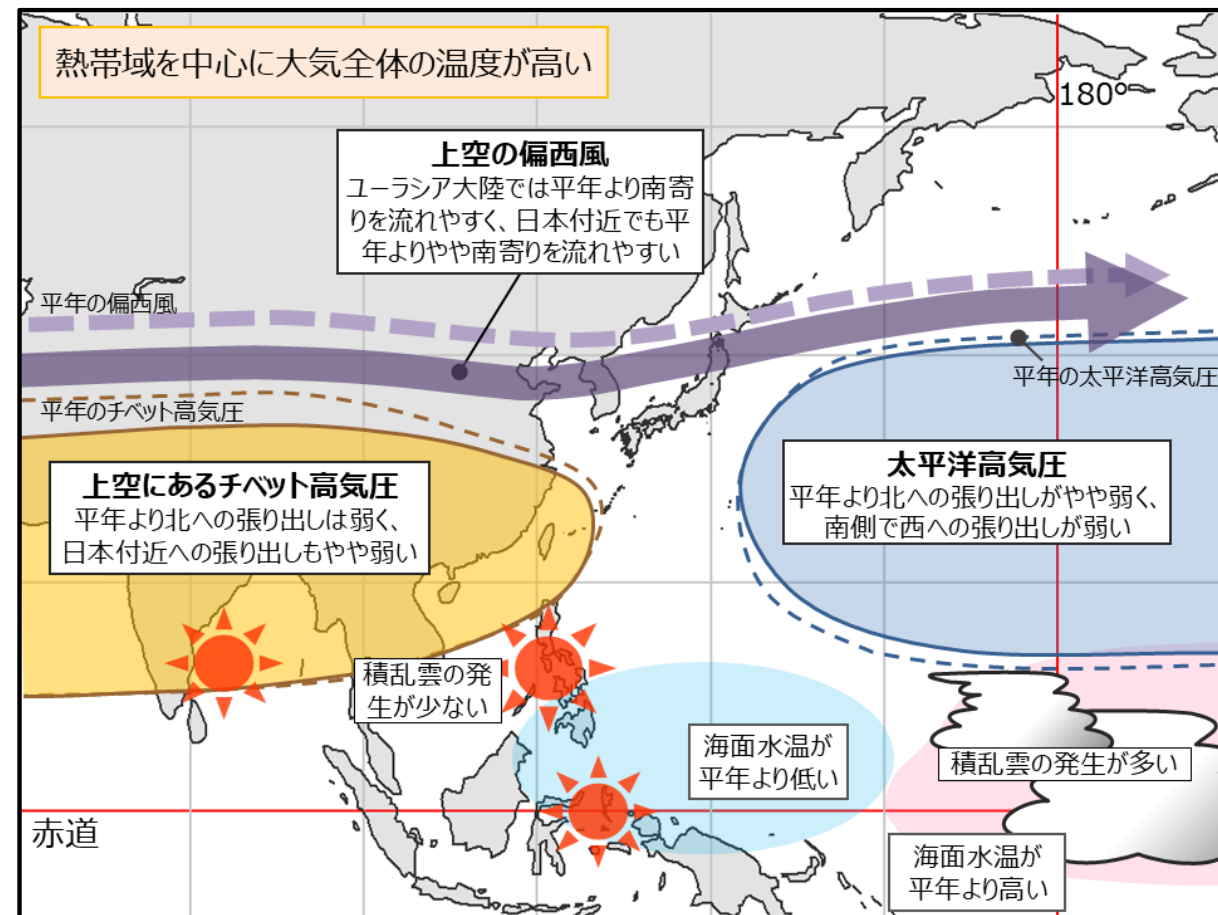
海面水温の予測図（8～10月）



海面水温が高い海域が、太平洋赤道域西部
→ 太平洋赤道域中・東部へ

6月の基準値の差（月平均）は、既に+1.9℃
（6月の段階で+1.9度まで上昇したのは1950年の統計開始以降はじめて）
+2.0℃を超えるエルニーニョ現象になる可能性
は充分ある。

予想される海洋と大気の特徴



【熱帯域の海面水温と対流活動】

- **エルニーニョ現象**が続く見込みで、海面水温は太平洋赤道域の東部～中部で高く、西部で低い。
- 積乱雲の発生は、太平洋熱帯域の東部～中部で多く、インドからインドネシア付近にかけて少ない

気温のポイント

3か月平均では、**平年並か高い**

大気の流れは、9月を中心に

- ・ 上空の偏西風はユーラシア大陸では平年より南寄りを流れやすく、日本付近でもやや南寄りを流れやすい。
- ・ チベット高気圧は北への張り出しは弱く、日本付近への張り出しもやや弱い。
- ・ 太平洋高気圧は北への張り出しがやや弱い。

見込み。これらの要因では、日本付近では通常は気温が低くなるが、

- **地球温暖化やエルニーニョ現象等**により熱帯域を中心に**大気全体の温度が高く、暖かい空気に覆われやすい**

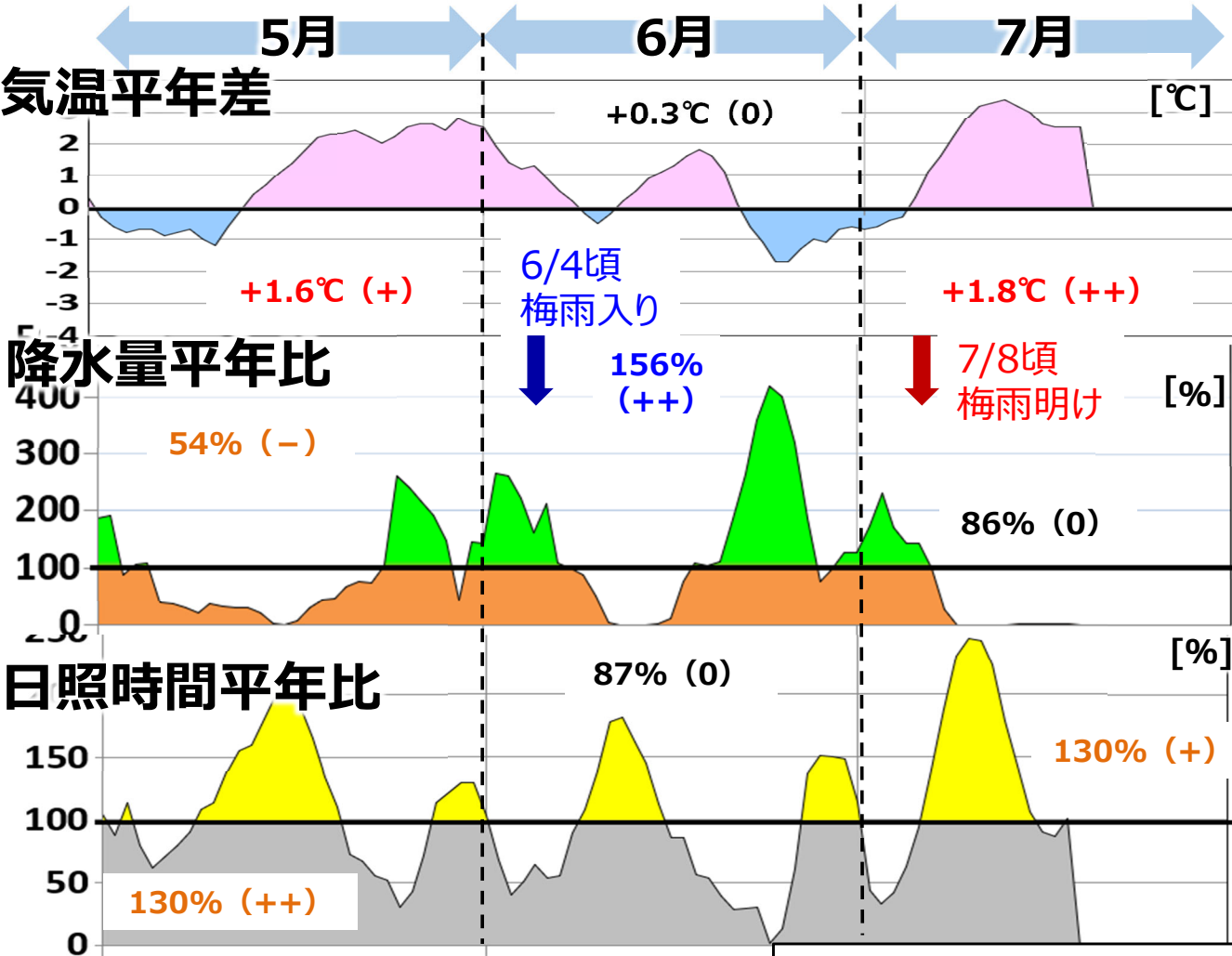
見込み。なお、**8月**は、上空の偏西風はほぼ平年の位置を流れ、**高温**

降水量のポイント

ほぼ平年並の予想

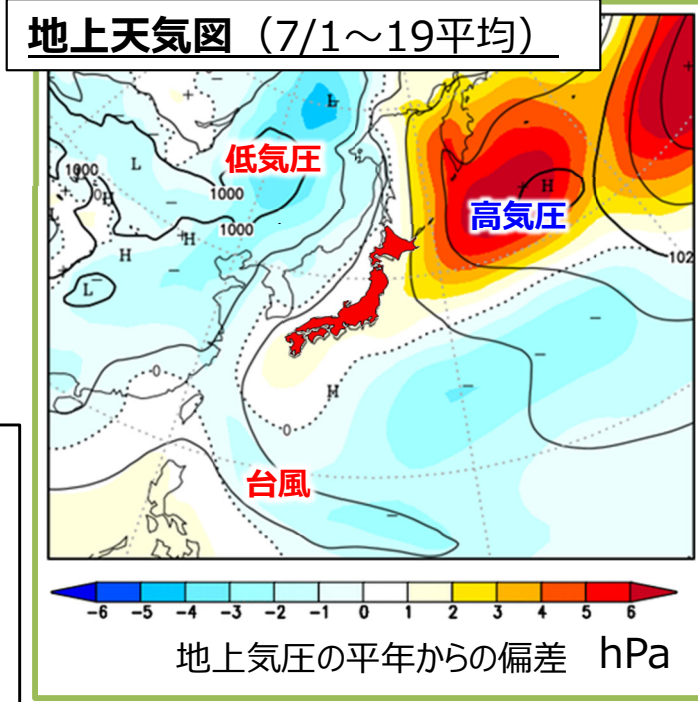
降水量はほぼ平年並を見込んでいるものの、台風・秋雨のシーズン。大雨には引き続き注意。

九州北部地方の天候経過（5～7月）



【7月（19日まで）の天候】

- 梅雨明け（7月8日頃）後は、晴れの日が多く、南からの暖かい空気が流れ込んだ影響も加わり猛暑日となった所もあり、気温はかなり高かった。
- 上旬の前半は線状降水帯が発生するなど大雨となったが、梅雨明けが早かったため降水量は平年並。
- 梅雨明けが早く、高気圧に覆われて晴れの日が続いたため、日照時間は多かった。



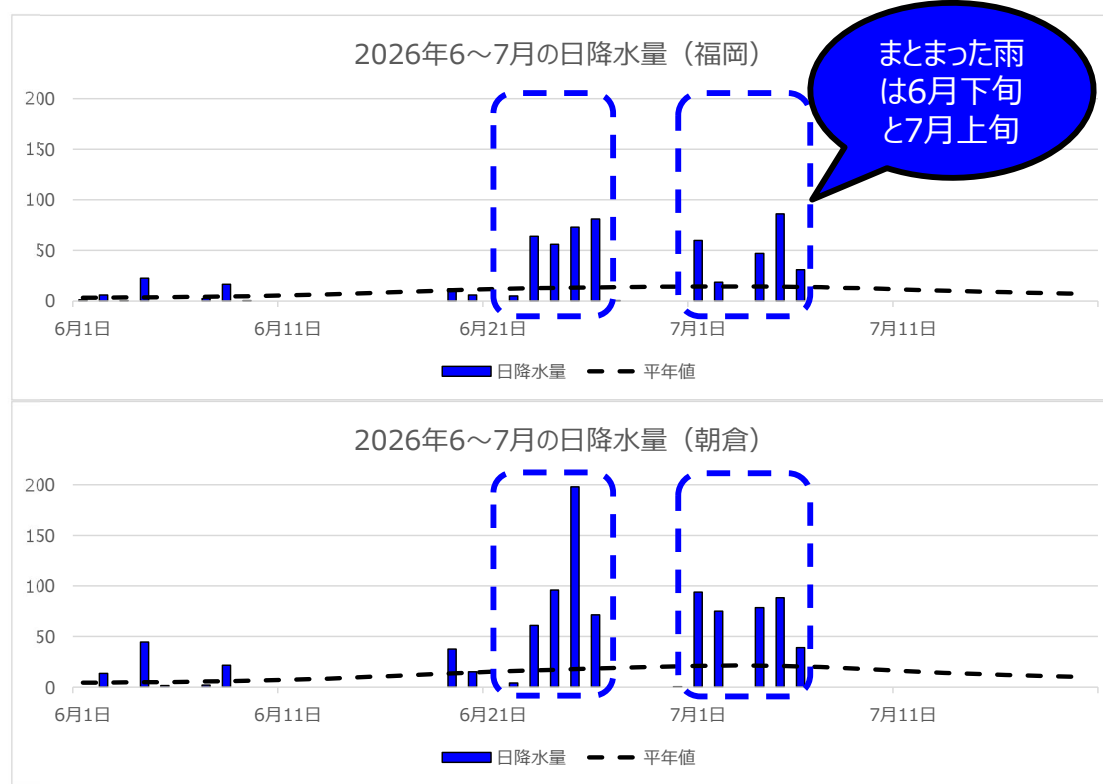
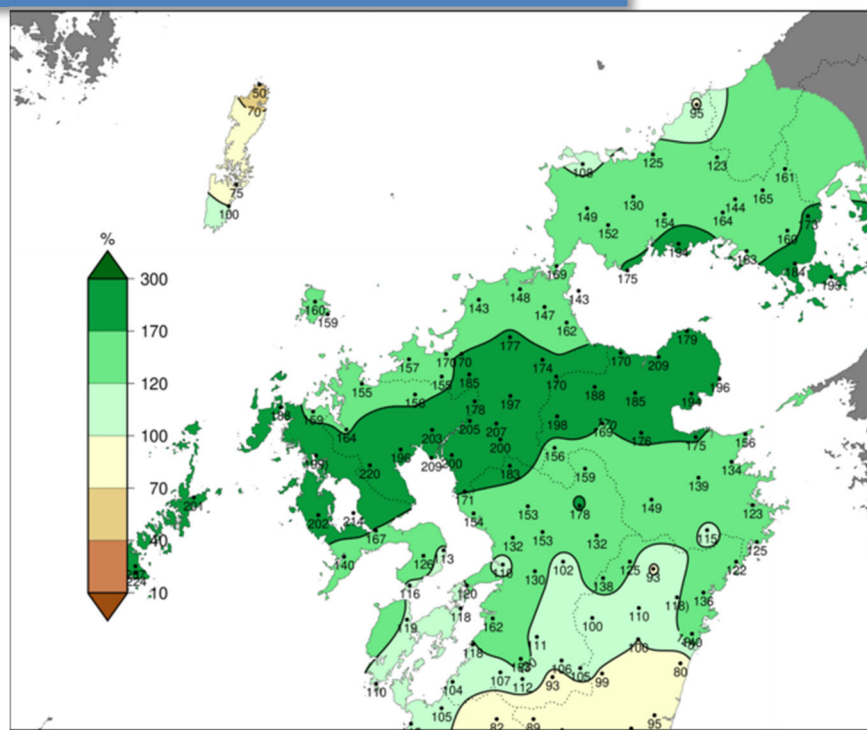
数値は月平年差（比）・階級区分値
7月の値は19日までの暫定値
グラフは5日移動平均値でプロット

階級区分値	
(++)	: かなり高い/かなり多い
(+)	: 高い/多い
(0)	: 平年並
(-)	: 低い/少ない
(--)	: かなり低い/かなり少ない

今年の梅雨の特徴 (速報値)

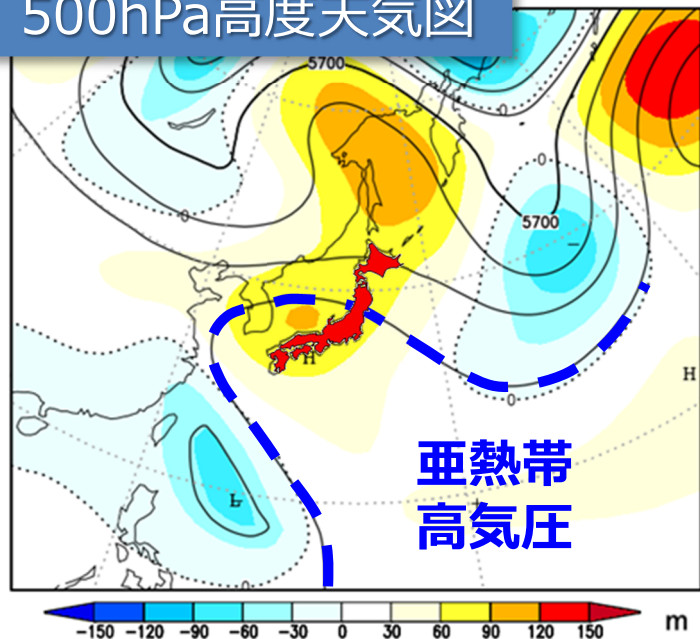
- ✓ 2026年は、九州北部地方（山口県を含む）では6月4日頃に梅雨入りし、7月8日頃に梅雨明けしたとみられます（速報値）。
- ✓ 梅雨入り後、6月中旬は移動性高気圧に覆われてやすく、曇りや雨の日が少なくなりました。6月下旬のはじめから中ごろと7月上旬の前半は、梅雨前線の影響を受けやすく、また台風第7号や第8号からの暖かく湿った空気が流れ込んだ影響も加わって、大雨となった所がありました。
- ✓ **7月2日には佐賀県、長崎県、福岡県、大分県、熊本県で、7月5日には熊本県で線状降水帯が発生**しました。
- ✓ これらの影響で、この期間の降水量は**平年を上回った所が多くなりました**。

6/4～7/7の降水量平年比

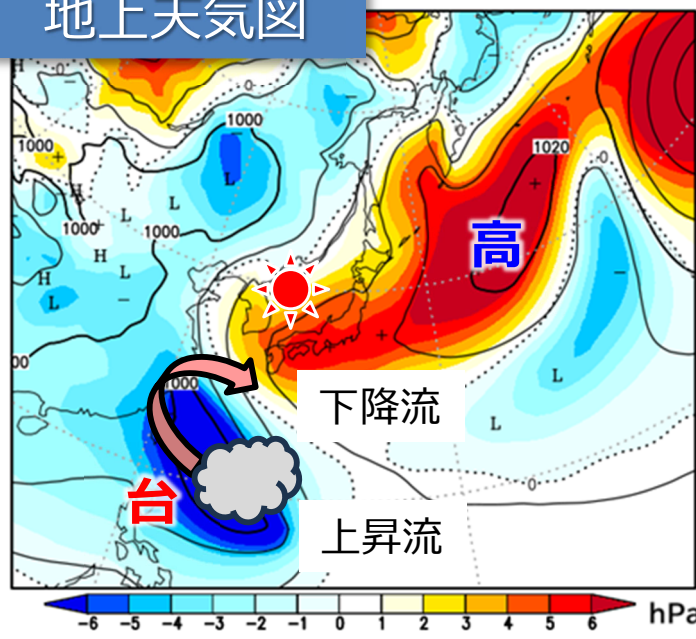


梅雨明け直後の猛暑日 7/8～12

500hPa高度天気図



地上天気図

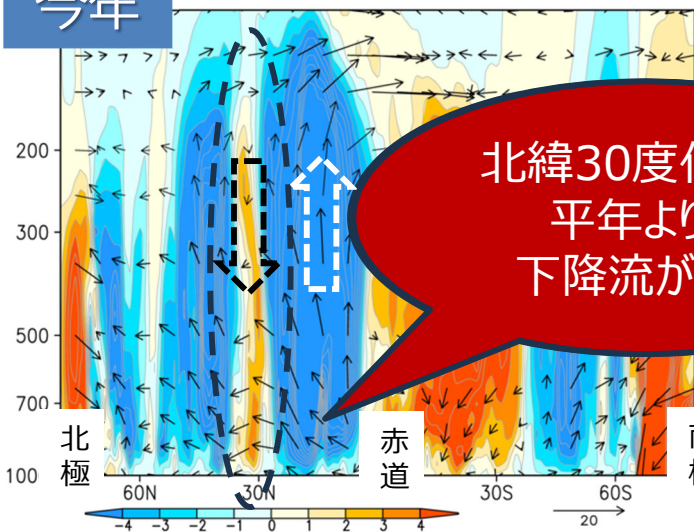


猛暑となった要因

- ✓ 本州付近の上空では、亜熱帯高気圧が西・東日本付近に張り出していました。
- ✓ 地上では、西・東日本付近は、高気圧圏内にあり、**晴れて強い日射の影響で昇温しました。**
- ✓ 台風第9号の影響で、西日本付近は、**下降流が平年よりも強く、断熱圧縮で昇温しました。**
- ✓ 11～12日は、高気圧の縁をまわって**南東からの暖かく湿った空気が流れ込み、九州山地の北側（日本海側）を中心に、山越えの風（フェーン現象）で昇温しました。**

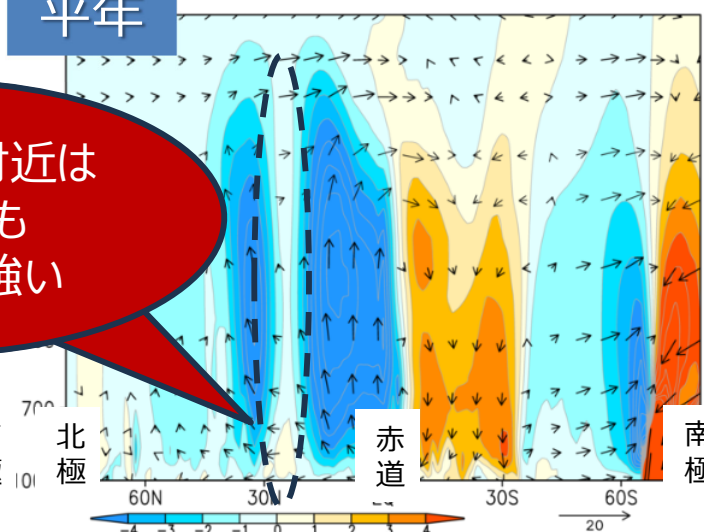
今年

青：上昇流 赤：下降流



平年

青：上昇流 赤：下降流



北緯30度付近は
平年よりも
下降流が強い

東経120～135度の子午面循環

8～10月の見通しのまとめ

予報のポイント

- 向こう3か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、**平年並**か**高い**でしょう。

留意していただきたいこと

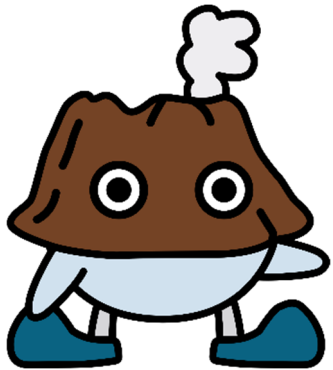
- 8月は**高温**の予報。
- 梅雨明け以降、気温がかなり高い状態が続いています。**これから8月上旬までは、気温が1年を通して最も高い時期**ですので、**熱中症の危険性が高い状態が続きます**。屋外での活動等では飲料水や日陰を十分に確保するなど**熱中症対策**を行い、**健康管理に注意**してください。また、農作物や家畜の管理等にも注意してください。

- **降水量はほぼ平年並**の予報。
- **台風や秋雨の時期**であり、**近年は大雨の発生頻度が増加**しています。**最新の気象情報等を活用**いただき、**大雨・台風への備え**をお願いします。

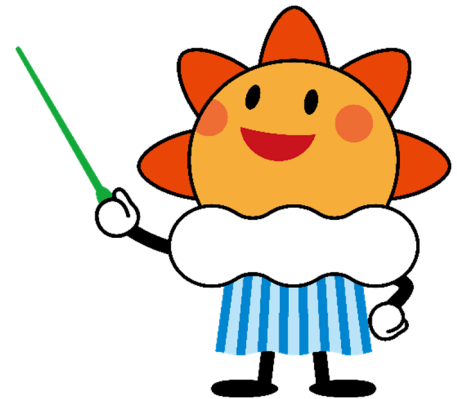
次回の3か月予報の発表は、**8月25日（火）14時**です。



参考資料



ぼるけん

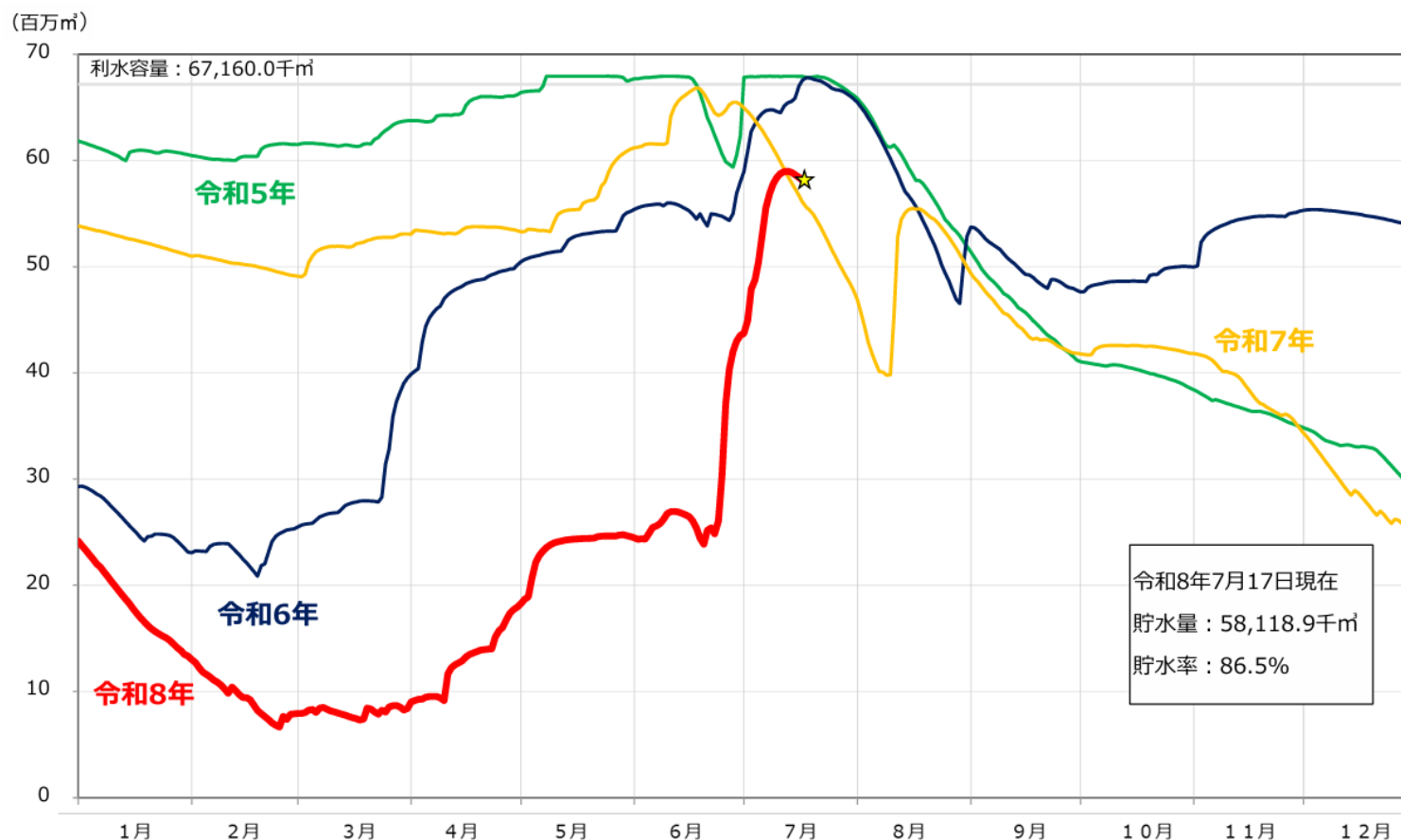


はれるん

ダムの貯水率時系列（筑後川水系）

7/17時点

- ✓ 令和7年9月以降、降水量が少ない状態が続き、12月からは「少雨に関する九州北部地方（山口県を含む）気象情報」を発表し、注意を喚起（令和8年4月まで）。
- ✓ 6月下旬からの雨により、筑後川水系等のダム貯水率は80%を超え、当面水利用に支障のない状況となり、渇水は解消した。



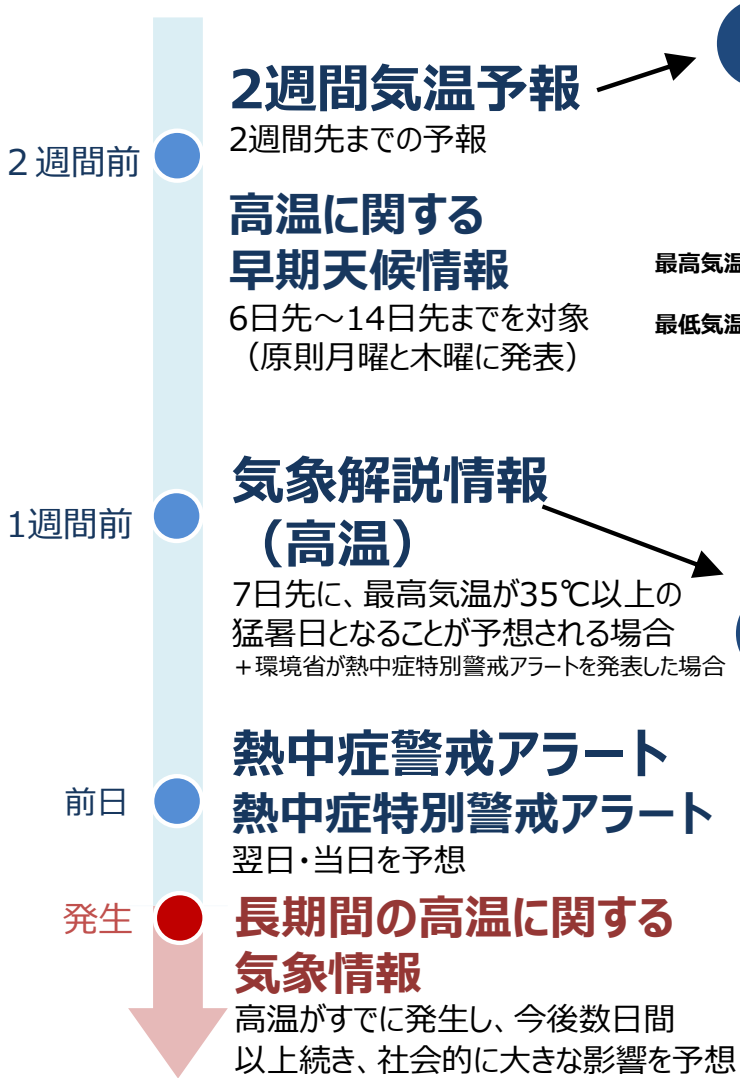
※令和7年4月1日 寺内ダム再生事業に伴う利水容量の変更（67,930.0千㎡ → 67,160.0千㎡）

7/8
嘉瀬川水系
渇水調整解除

7/13
●筑後川水系
渇水調整解除
●九州地方整備局
渇水対策本部解散
●国土交通省
渇水情報連絡室
解散

福岡地区水道企業団HP：<https://www.f-suiki.or.jp/waterquality-info/water-info/>

段階的に発表する防災気象情報（高温）



2週間気温予報

2週間先までの予報

高温に関する早期天候情報

6日先～14日先までを対象
(原則月曜と木曜に発表)

2週間気温予報の例

1週目の予報（日別）								2週目の予報（5日間平均）				
当日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目 (6～10 日目)	9日目 (7～11 日目)	10日目 (8～12 日目)	11日目 (9～13 日目)	12日目 (10～ 14日)
最高気温	26	26	27	29	32	32	33	34	35	35	35	35
最低気温	23	23	23	24	25	25	25	26	26	26	26	26

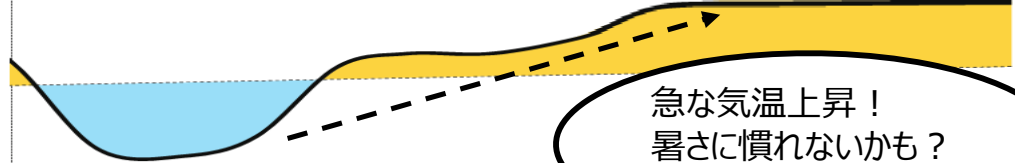
かなり高い

高い

平年並

低い

かなり低い



急な気温上昇！
暑さに慣れないかも？
熱中症に注意しよう！



気象解説情報（高温）の例

九州北部地方（山口県を含む）気象解説情報（高温） 第1号
令和8年7月16日15時16分 福岡管区气象台発表
(見出し)
九州北部地方（山口県を含む）では、7月23日頃にかけて、最高気温が35度以上となるところがあるでしょう。
(本文)
[気象概況]
九州北部地方（山口県を含む）では、7月23日頃にかけて高気圧に覆われて晴れる日や暖かい空気に覆われる日があるため、**最高気温が35度以上**となるところがある見込みです。
[防災事項]
熱中症などの健康管理に注意してください。



農作物・家畜の高温
障害にも注意

段階的に発表する防災気象情報（大雨）

- **大雨**の発生の**5日前**から、**早期注意情報**で、**警報級の大雨の可能性**を発表しています。
 - 早期注意情報や時系列情報等は、心構えを高め、事前の体制確保の検討に
- **キキクル**や**気象防災速報**は、**避難の判断**や**後押し**に活用してください。



早期注意情報（大雨）の例

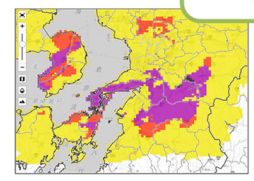
	当日	1日後				2日後		3日後	4日後	5日後
早期注意情報	18-24	00-06	06-12	12-18	18-24	00-12	12-24			
大雨	-	-	-	-	-	-	-	[中]	[高]	[中]
土砂災害	-	-	-	-	-	-	-			

キキクル

気象防災速報



3～5日後は大雨の可能性。
今のうちに確認・準備しておこう。



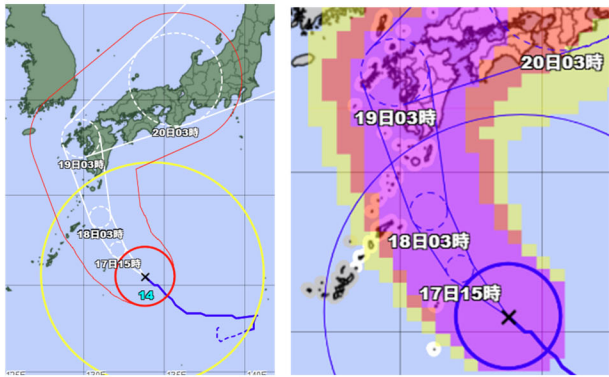
キキクルで
避難判断



段階的に発表する防災気象情報（台風）



- 台風経路・強度予報
- 暴風域に入る確率
- 気象解説情報（台風第〇号）
- 早期注意情報



福岡県福岡地方	16日	17日				18日			19日	20日	21日
警報級の可能性	18-24	00-06	06-12	12-18	18-24	00-12	12-24				
大雨	-	-	-	-	[中]	[高]	[高]	[高]	[中]	-	-
土砂災害	-	-	-	-	[中]	[高]	[高]	[高]	[中]	-	-
暴風(雪)	-	-	-	-	[中]	[高]	[高]	[高]	[中]	-	-
波浪	-	-	-	-	[中]	[高]	[高]	[高]	[中]	-	-
高潮	-	-	-	-	-	[高]	[高]	[高]	-	-	-

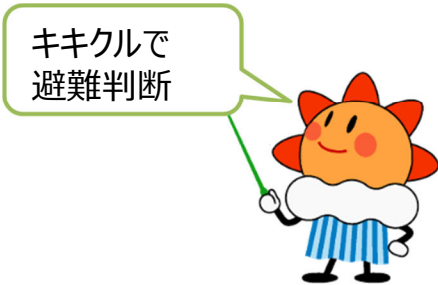


2日前～ 時系列情報（警報等の見通し）

〇〇市	21日				22日								23日
	18-21	21-24	00-03	03-06	06-09	09-12	12-15	15-18	18-21	21-24			
1時間最大雨量 (mm)	15	15	30	50	80	80	50	50	20	10			
24時間最大雨量 (mm)	250												
大雨													
土砂災害													
暴風 (m/s)	陸上	12	12	15	15	20	30	30	20	20	15		
	海上	15	15	20	20	25	35	35	25	25	20		

- 警戒レベル相当情報
注意報・警報・危険警報・特別警報
- キキクル
- 気象防災速報

〇〇市	大雨
レベル5相当	
レベル4相当	レベル4 大雨危険警報
レベル3相当	
レベル2	

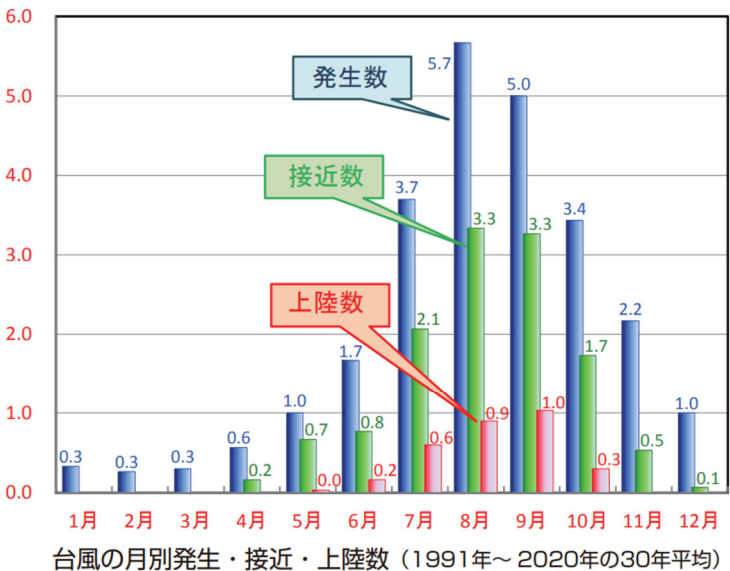


台風への備え① ～平年値～

台風の発生・接近・上陸数

台風は1年間に平均して25個程度発生し、12個程度日本に接近、3個程度が日本に上陸しています。発生・接近・上陸ともに、7月から10月にかけて最も多くなります。

九州へは1年間に平均して4個程度接近し、夏（6～8月）は、1年間に平均して2個程度接近しています。



地方ごとの台風接近数の平年値

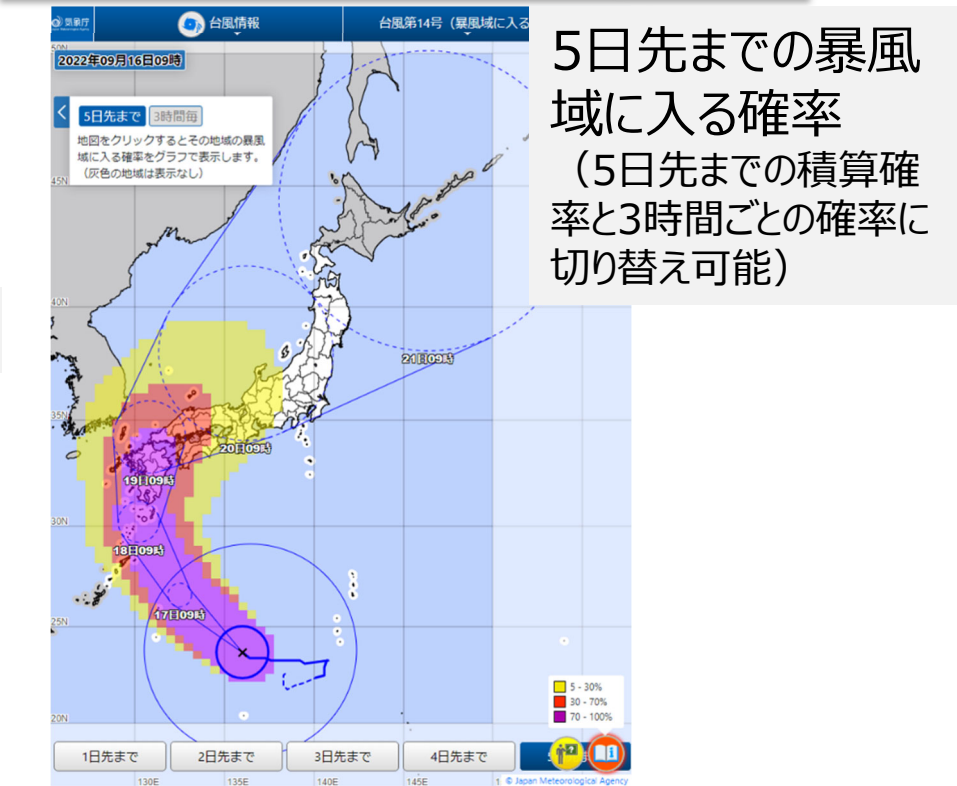
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
九州南部・ 奄美地方	奄美地方				0.0	0.2	0.4	0.7	1.1	1.3	0.7			4.3
	九州南部				0.0	0.1	0.4	0.7	1.0	1.2	0.5			3.9
九州北部地方					0.0	0.1	0.3	0.8	1.1	1.1	0.4			3.8

台風への備え② ～台風情報～

台風経路図、全般気象解説情報（台風）

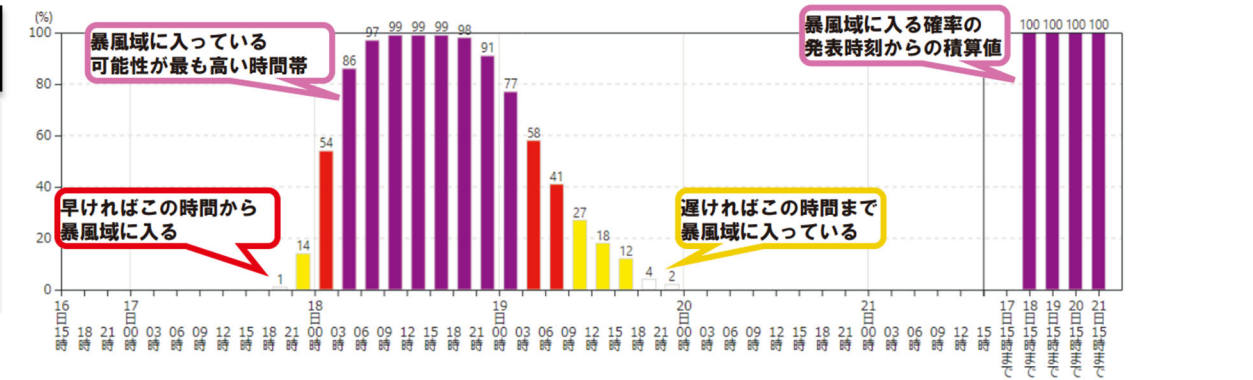


暴風域に入る確率（面的分布）



暴風域に入る確率（時系列）

地域ごとに5日先までの暴風域に入る確率を時系列で表示したもの



最近の8～10月の天候

過去10年間の九州北部地方の地域平均の平均気温（平年差℃）と階級

年	8～10月	8月	9月	10月
2025	2.3	1.2	3.0	2.9
2024	2.8	1.9	3.7	2.6
2023	1.0	1.1	2.1	-0.2
2022	0.6	1.0	1.0	-0.1
2021	0.5	-0.7	0.9	1.1
2020	0.3	1.3	-0.3	-0.3
2019	0.7	-0.3	1.3	1.2
2018	0.2	1.5	0.0	-0.8
2017	0.1	0.8	-0.7	0.4
2016	1.2	0.9	0.7	2.0

かなり高い

高い

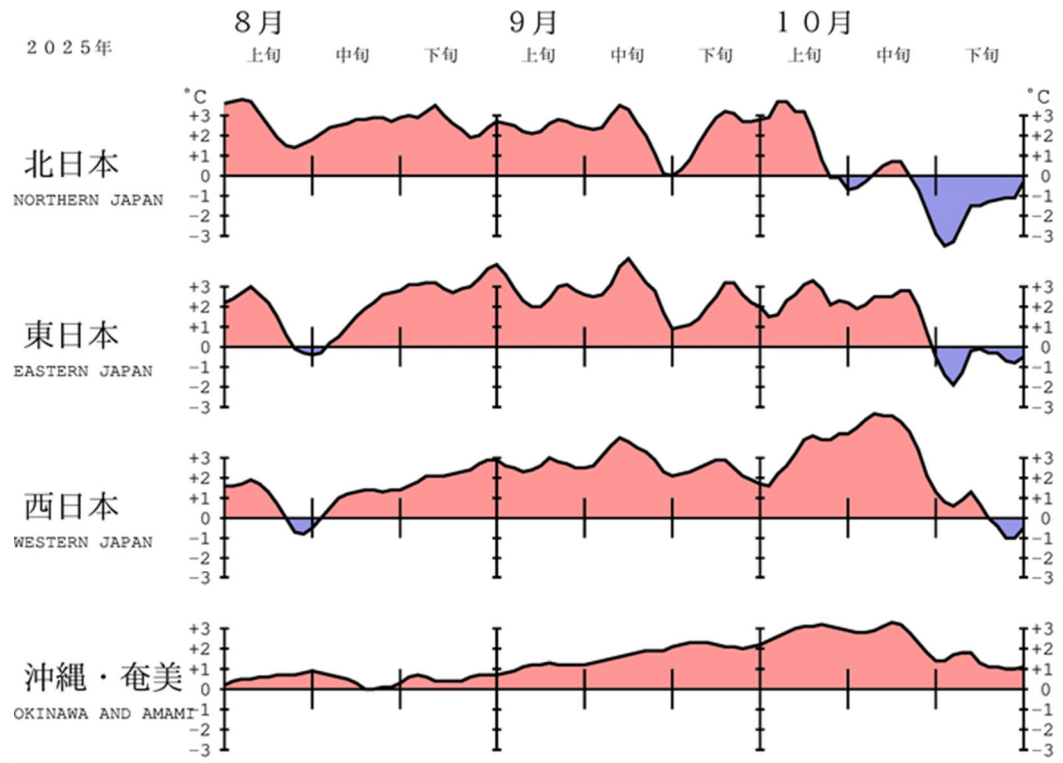
平年並

低い

かなり低い

年の色は、**赤**：秋にエルニーニョ現象が発生している
青：秋にラニーニャ現象が発生している

2025年 地域平均気温平年差



TIME SERIES OF 5-DAY RUNNING MEAN TEMPERATURE ANOMALY FOR SUBDIVISIONS

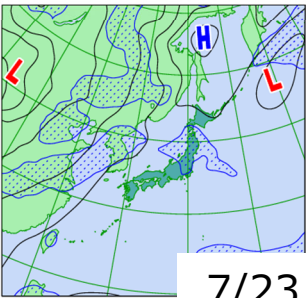
地域平均気温平年差の5日移動平均時系列

更新日：2025年11月4日

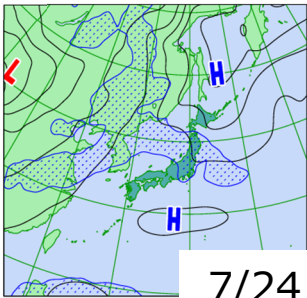
- ・最近10年の8～10月の平均気温は、全国的に平年並か高い年が多く、2024年からは全国的にかなり的高温だった。エルニーニョ現象が発生した2018年は平年並だったが、2023年は高温だった。
- ・昨年（2025年）の8～10月は、偏西風の北偏で暖かい空気に覆われ、全国的にかなり的高温だった。8月は前線や低気圧の影響で線状降水帯が発生し記録的な大雨の所があった。

週間天気予報（7/21 11時発表）

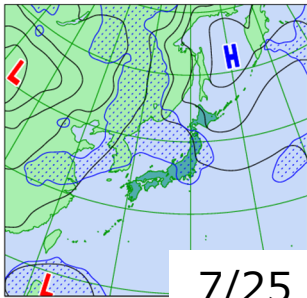
予想天気図



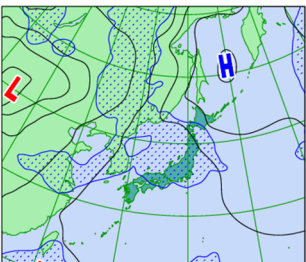
SURFACE PRESS, PRECIP(48-72)



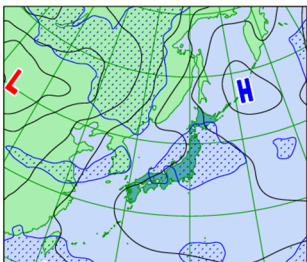
SURFACE PRESS, PRECIP(72-96)



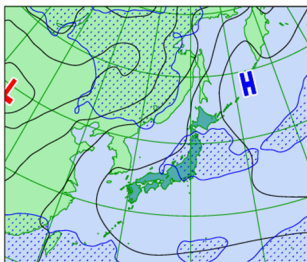
SURFACE PRESS, PRECIP(96-1



SURFACE PRESS, PRECIP(120-14



SURFACE PRESS, PRECIP(144-16



SURFACE PRESS, PRECIP(168-18

L：低気圧 H：高気圧
陰影部：24時間で5mm以上の予想降水域

向こう1週間の見通し

高気圧に覆われるため、晴れの日が多いでしょう。気温が平年よりかなり高くなり、最高気温が35度以上の猛暑日となる所があるでしょう。熱中症など健康管理に注意してください。

福岡の降水量は **平年並** でしょう（平年並の範囲： 4 ～ 35 mm）。

週間天気予報

（福岡県）

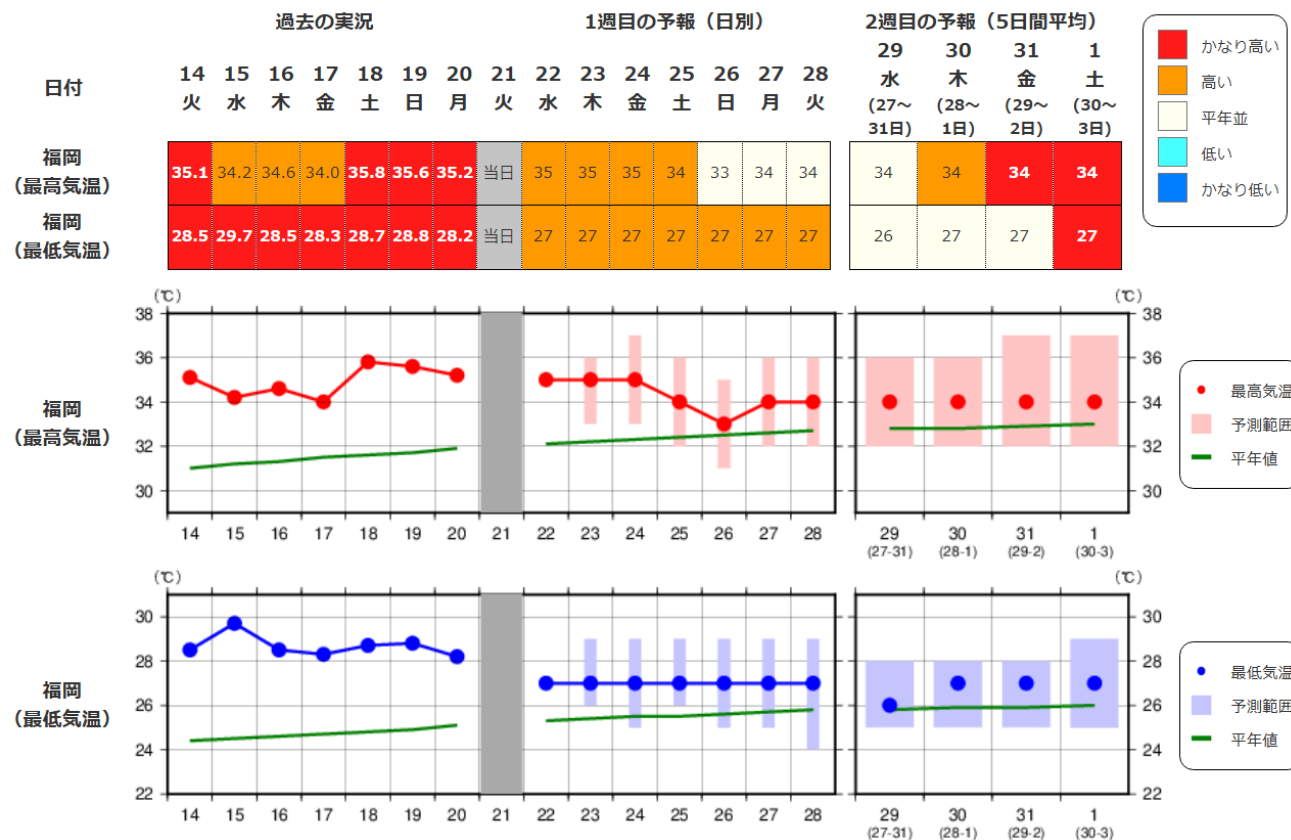
福岡県の天気予報（7日先まで）								
2026年07月21日11時 福岡管区气象台 発表								
日付	今日 21日(火)	明日 22日(水)	明後日 23日(木)	24日(金)	25日(土)	26日(日)	27日(月)	28日(火)
福岡県	晴 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇
降水確率(%)	-/-/20/10	10/10/10/10	20	20	20	20	20	20
信頼度	-	-	-	A	A	A	A	A
福岡 気温 (°C)	最高	34	35	35 (33~36)	34 (32~36)	33 (31~35)	34 (32~36)	34 (32~36)
	最低	-	27 (26~29)	27 (25~29)	27 (26~29)	27 (25~29)	27 (25~29)	27 (24~29)
向こう一週間（明日から7日先まで）の平年値								
降水量の7日間合計				最低気温		最高気温		
福岡				平年並 4 - 35mm		25.5°C		
						32.4°C		

2週間気温予報

2週間気温予報（福岡）

（7/20 14:30発表 7/21 11:00更新）

毎日14時30分発表
5時/11時/17時更新

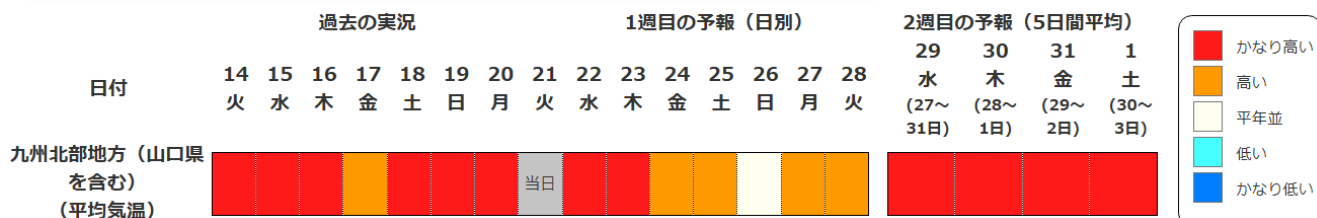


2週間気温予報 概況文 （抜粋）

令和8年7月20日14時30分
気象庁 発表

東海地方と西日本の向こう
2週間の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、かなり高い日が多いでしょう。農作物の管理等に注意してください。また、熱中症の危険性が高い状態が続きますので、健康管理に注意してください。

2週間気温予報（九州北部地方）



1か月予報（7/16発表）

毎週木曜日14時30分発表

《特に注意を要する事項》

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

予報のポイント

- ✓ 暖かい空気に覆われやすいため向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。

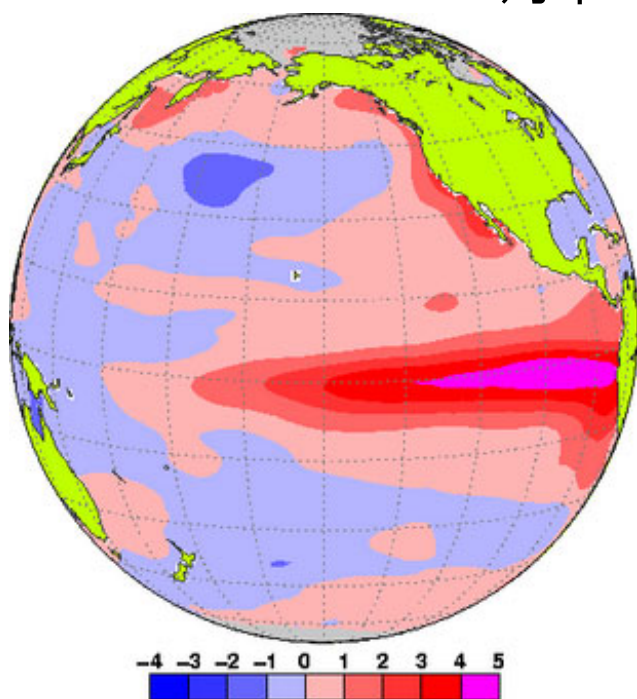
向こう1か月の平均気温・降水量・日照時間

	平均気温（向こう1か月）	降水量（向こう1か月）	日照時間（向こう1か月）
九州北部地方（山口県含む）	低10 並20 高70% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み
数値は予想される出現確率（%）です	平均気温（1か月） 低い確率（%） 50 40 40 50 高い確率（%） ↑ 平年並も40 ↓	降水量（1か月） 少ない確率（%） 50 40 40 50 多い確率（%） ↑ 平年並も40 ↓	日照時間（1か月） 少ない確率（%） 50 40 40 50 多い確率（%） ↑ 平年並も40 ↓

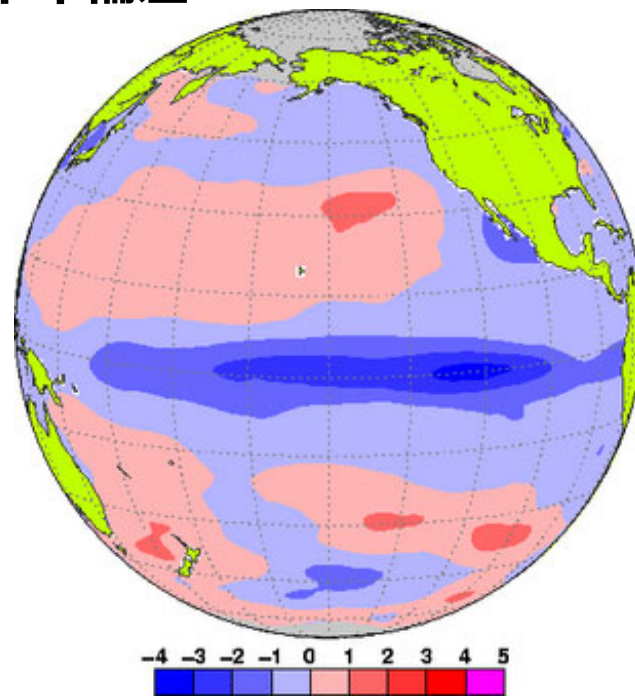
エルニーニョ現象・ラニーニャ現象①

エルニーニョ現象とは、太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなり、その状態が1年程度続く現象です。逆に、同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続く現象はラニーニャ現象と呼ばれ、それぞれ数年おきに発生します。エルニーニョ現象やラニーニャ現象は、日本を含め世界中の異常な天候の要因となり得ると考えられています。

月平均海面水温平年偏差



エルニーニョ現象発生時
(1997年11月)

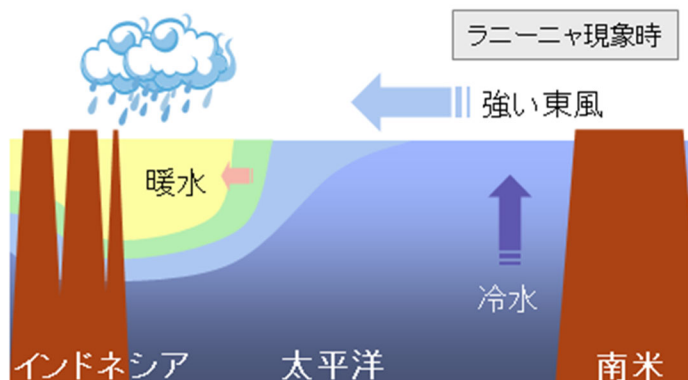
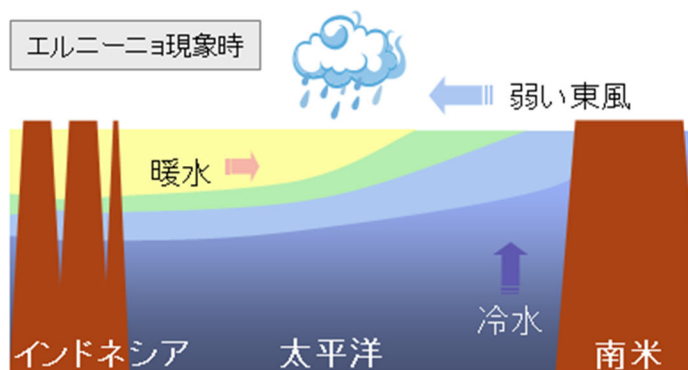
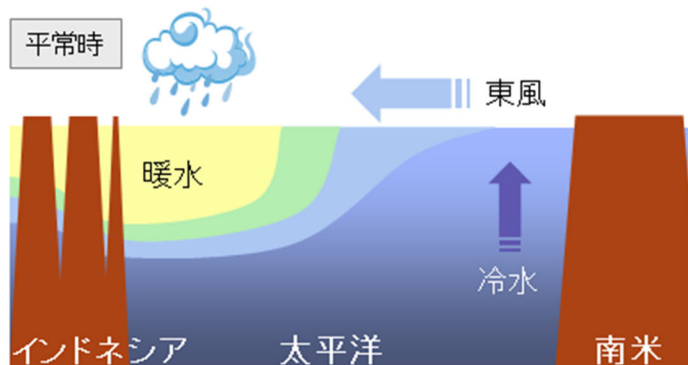


ラニーニャ現象発生時
(1988年12月)

気象庁ホームページ（エルニーニョ/ラニーニャ現象とは）

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/data/elnino/learning/faq/whatiselnino.html>

エルニーニョ現象・ラニーニャ現象②



平常時の状態

太平洋の熱帯域では、貿易風と呼ばれる東風が常に吹いているため、海面付近の暖かい海水が太平洋の西側に吹き寄せられています。西部のインドネシア近海では海面下数百メートルまでの表層に暖かい海水が蓄積し、東部の南米沖では、この東風と地球の自転の効果によって深いところから冷たい海水が海面近くに湧き上がっています。このため、海面水温は太平洋赤道域の西部で高く、東部で低くなっています。海面水温の高い太平洋西部では、海面からの蒸発が盛んで、大気中に大量の水蒸気が供給され、上空で積乱雲が盛んに発生します。

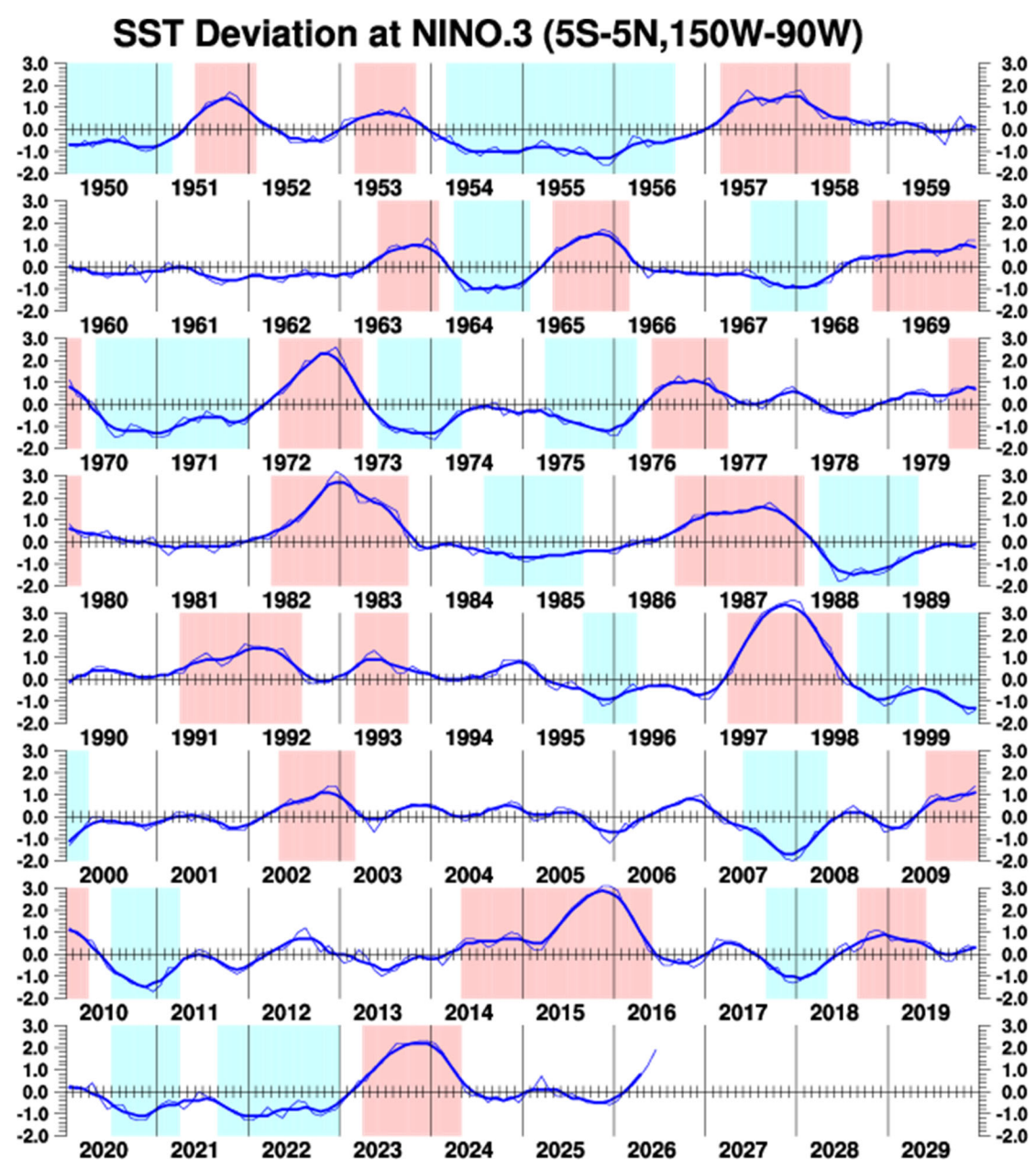
エルニーニョ現象時の状態

エルニーニョ現象が発生している時には、東風が平常時よりも弱くなり、西部に溜まっていた暖かい海水が東方へ広がるとともに、東部では冷たい水の湧き上がりが弱まっています。このため、太平洋赤道域の中部から東部では、海面水温が平常時よりも高くなっています。エルニーニョ現象発生時は、積乱雲が盛んに発生する海域が平常時より東へ移ります。

ラニーニャ現象時の状態

ラニーニャ現象が発生している時には、東風が平常時よりも強くなり、西部に暖かい海水がより厚く蓄積する一方、東部では冷たい水の湧き上がりが平常時より強くなります。このため、太平洋赤道域の中部から東部では、海面水温が平常時よりも低くなっています。ラニーニャ現象発生時は、インドネシア近海の海上では積乱雲がいつも盛んに発生します。

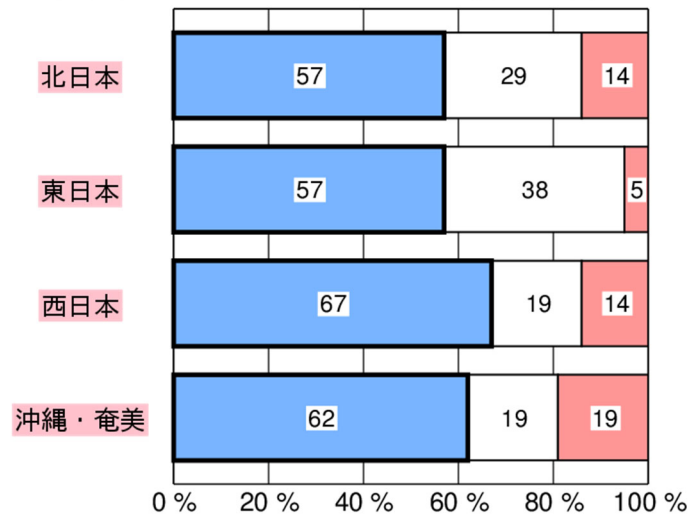
エルニーニョ現象・ラニーニャ現象の発生時期



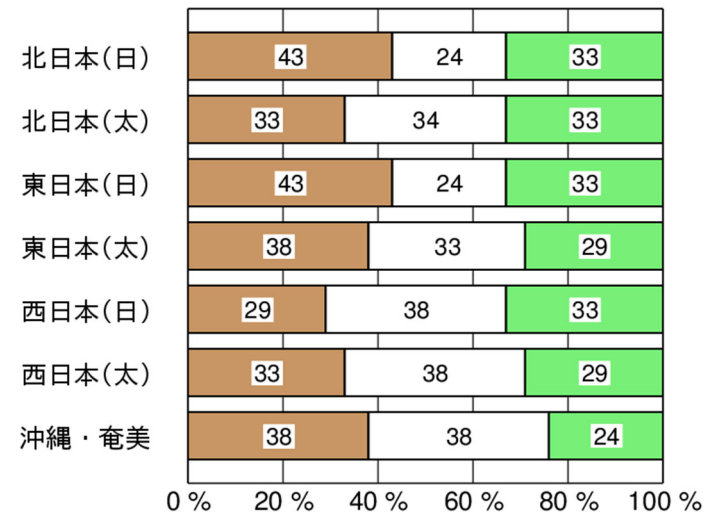
エルニーニョ現象			ラニーニャ現象		
発生期間	季節数	差の最大値 (月平均)	発生期間	季節数	差の最小値 (月平均)
			1949年秋～1950/51年冬	6	-1.0
1951年夏～1951/52年冬	3	+1.7			
1953年春～1953年秋	3	+1.0	1954年春～1956年夏	10	-1.6
1957年春～1958年夏	6	+1.8			
1963年夏～1963/64年冬	3	+1.3	1964年春～1964/65年冬	4	-1.2
1965年春～1965/66年冬	4	+1.7	1967年夏～1968年春	4	-1.0
1968年秋～1969/70年冬	6	+1.2	1970年春～1971/72年冬	8	-1.5
1972年春～1973年春	5	+2.6	1973年夏～1974年春	4	-1.6
			1975年春～1976年春	5	-1.4
1976年夏～1977年春	4	+1.3			
1979年秋～1979/80年冬	2	+0.8			
1982年春～1983年秋	7	+3.2	1984年夏～1985年夏	5	-0.9
1986年秋～1987/88年冬	6	+1.8	1988年春～1989年春	5	-1.8
1991年春～1992年夏	6	+1.6			
1993年春～1993年秋	3	+1.3	1995年秋～1996年春	3	-1.2
1997年春～1998年夏	6	+3.6	1998年秋～1999年春	3	-1.2
			1999年夏～2000年春	4	-1.6
2002年春～2002/03年冬	4	+1.4	2007年夏～2008年春	4	-2.0
2009年夏～2010年春	4	+1.4	2010年夏～2011年春	4	-1.7
2014年春～2016年春	9	+3.1	2017年秋～2018年春	3	-1.3
2018年秋～2019年春	3	+1.1	2020年夏～2021年春	4	-1.3
			2021年秋～2022/23年冬	6	-1.3
2023年春～2024年春	5	+2.3			

8～10月のエルニーニョ現象発生時の日本の天候の特徴

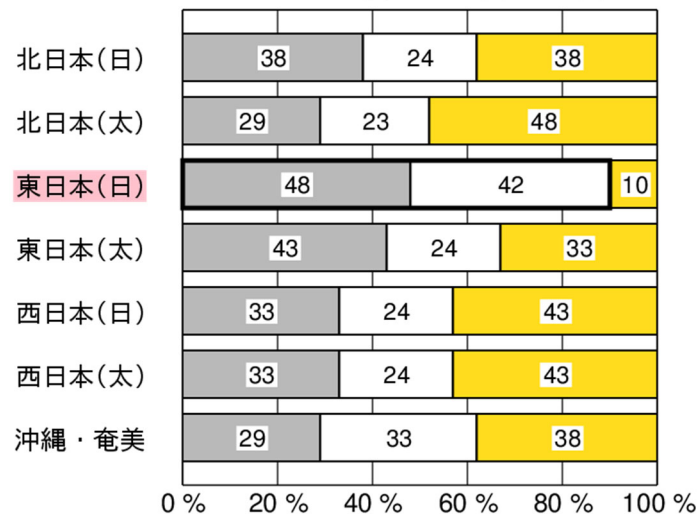
エルニーニョ現象が発生しているときの
平均気温 <8～10月> 低い 並 高い



エルニーニョ現象が発生しているときの
降水量 <8～10月> 少ない 並 多い



エルニーニョ現象が発生しているときの
日照時間 <8～10月> 少ない 並 多い

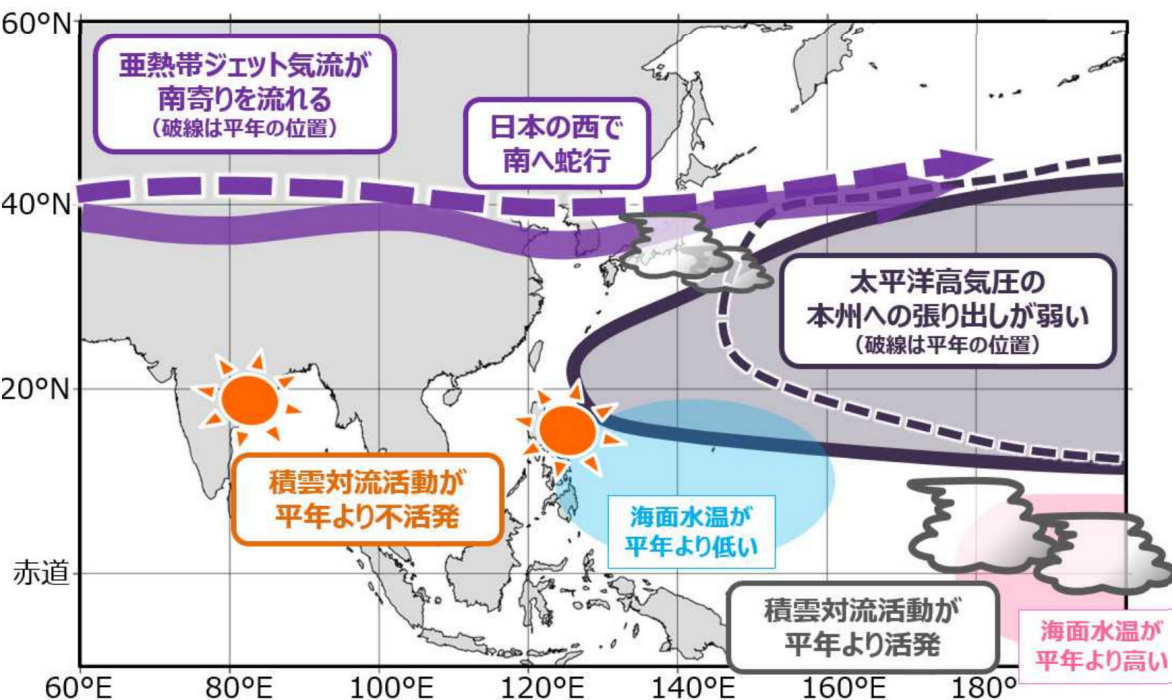


3か月（8～10月）の統計的に有意な傾向

- ・平均気温：全国で低い
- ・降水量：なし
- ・日照時間：東日本日本海側で
平年並か少ない

エルニーニョ現象時の夏の海洋と大気の特徴

エルニーニョ現象に伴う夏の海洋と大気の特徴



過去の統計（1948～2021年）では、

気温：北・東・西日本で**低い**

降水量：西日本日本海側

（近畿日本海側・山陰や九州北部地方）で**多い**

太平洋熱帯域の海面水温

西部：**低い** 中・東部：**高い**

太平洋赤道域の対流活動

中・東部：**活発**

インド付近、インドネシア付近

フィリピン東方海上：**不活発**

赤道域対流活動の東西の偏りにより

- ✓ 上空の偏西風はユーラシア大陸～日本付近を南寄りに流れる
- ✓ 上空の偏西風は、日本の西で南に蛇行
- ✓ 太平洋高気圧の本州付近への張り出しが弱い

季節予報技術資料 第2巻（令和6年度）（気象庁）より

https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/kisetsu_gijutsu/02/chapter1.pdf

大雨の発生頻度の変化

気象庁HP

大雨や猛暑日など（極端現象）のこれまでの変化



大雨の年間発生頻度は増加しており、

- より強度の強い雨ほど頻度の増加率が大い
- 1980年頃と比較して、おおむね2倍程度(※)に頻度が増加している
(※ 1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上など強度の強い雨)

これらの変化には、地球温暖化が影響している可能性がある

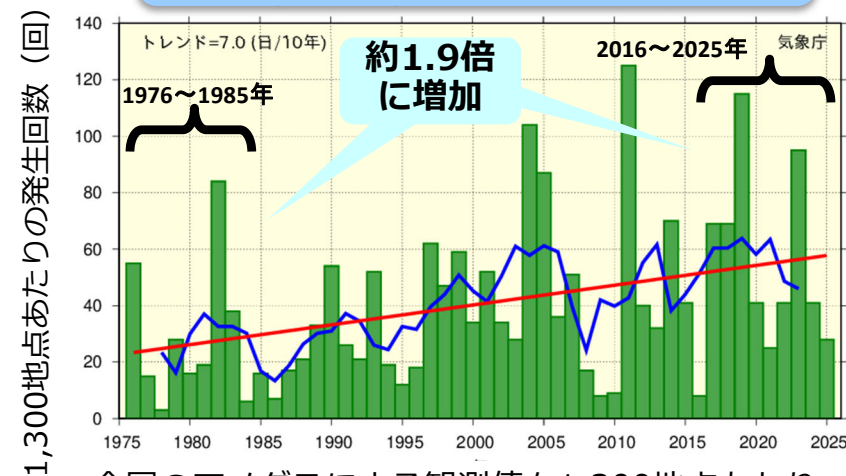
⇒大雨に対する備えの必要性を認識していただきたい

変化の倍率（2016-2025年平均 / 1976-1985年平均）

1時間降水量50mm以上	約1.5倍（約226回→約340回）
1時間降水量80mm以上	約1.8倍（約14回→約25回）
1時間降水量100mm以上	約2.0倍（約2.2回→約4.4回）
3時間降水量100mm以上	約1.6倍（約155回→約248回）
3時間降水量150mm以上	約1.8倍（約19回→約33回）
3時間降水量200mm以上	約2.1倍（約2.8回→約5.9回）
日降水量200mm以上	約1.5倍（約160日→約240日）
日降水量300mm以上	約1.9倍（約28日→約53日）
日降水量400mm以上	約2.1倍（約6.4日→約13日）

- ・変化の倍率は、最初の10年間（1976～1985年）と最近10年間（2016～2025年）の比。
- ・回数及び日数はアメダス1,300地点あたりの換算値。

日降水量300mm以上の大雨の年間日数（1976年～）



- ・全国のアメダスによる観測値を1,300地点あたりに換算した値
- ・棒グラフ（緑色）は各年の値、青線は5年移動平均値、赤い直線は長期変化傾向を示す。

あるいは、以下のような幅を持った表現もできる。ただし、数値は統計手法や期間等で変わりうることに留意。

1980年頃と比較して、約1.8倍～約2.1倍(※)に頻度が増加している

(※ 1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上など強度の強い雨。統計期間は1976～2025年)

季節予報とは？

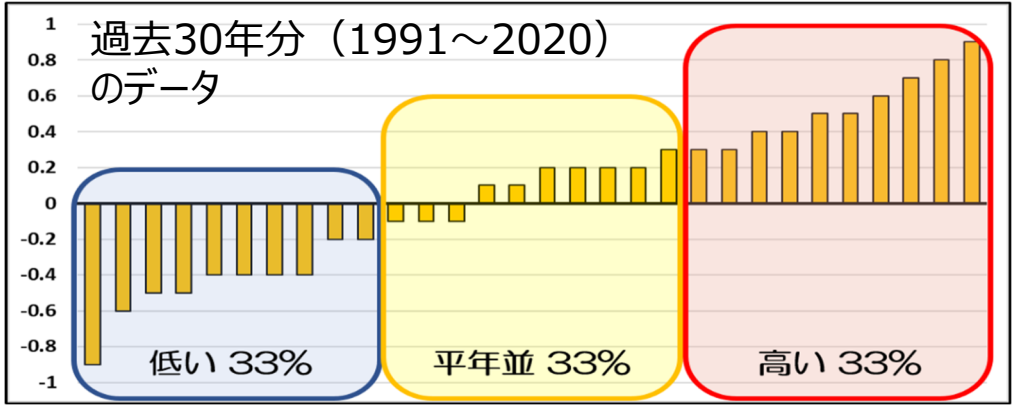
季節予報は、日々の天気ではなく、ある地域の大まかな天候（平年の気候と比べて、どのくらい偏った天候か）を予報します。

地域： 日本全国を11地方に分類（右図）

予報する要素

例） 1 か月間、3 か月間の平均気温
1 か月間、3 か月間の降水量
1 か月間、3 か月間の日照時間 など

予報は3つの階級
低い（少ない）・平年並・高い（多い）の
どの階級に入るかを予報します

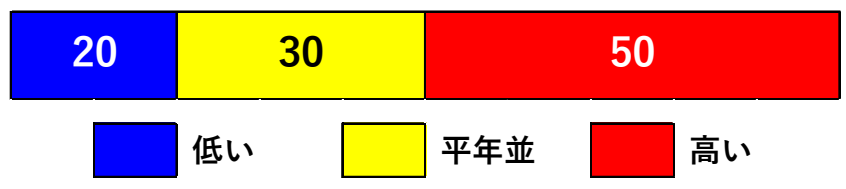


現在が平年値期間の30年と同じ気候だとした場合、
「高い」「平年並」「低い」という階級になる可能性は、それぞれ33%。

予報区

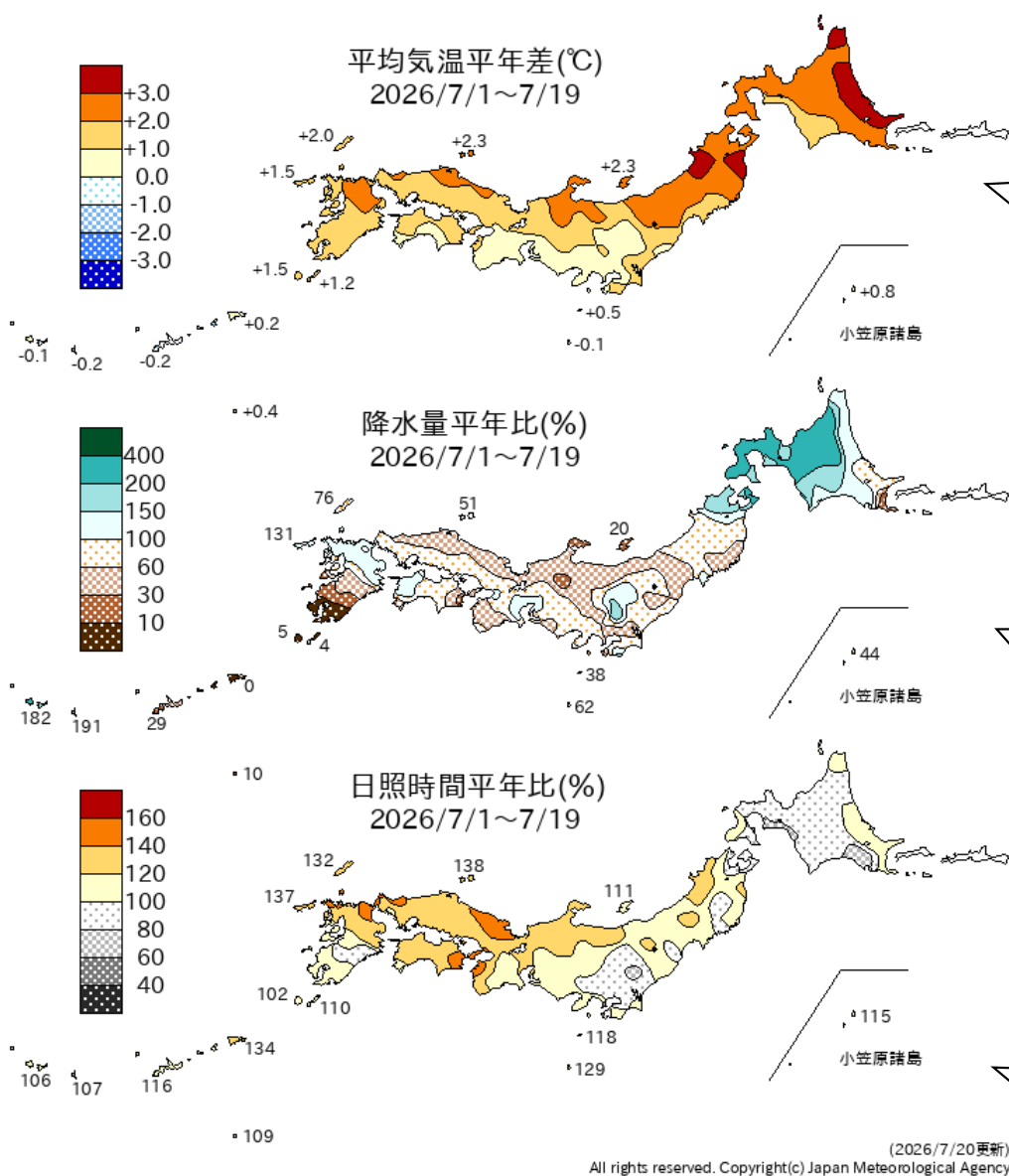


予報例 向こう3か月の気温



平年並か低くなる確率も50% 高くなる確率は50%

7月の実況（1～19日）



●北・東・西日本で高温

北・東・西日本を中心に暖かい空気に覆われやすかった。沖縄・奄美では、台風第9号通過後の海面水温の低下の影響を受けた時期があったが、暖かい空気に覆われた時期もあり、平年程度だった。

●北日本日本海側で顕著な多雨、東日本と西日本で少雨

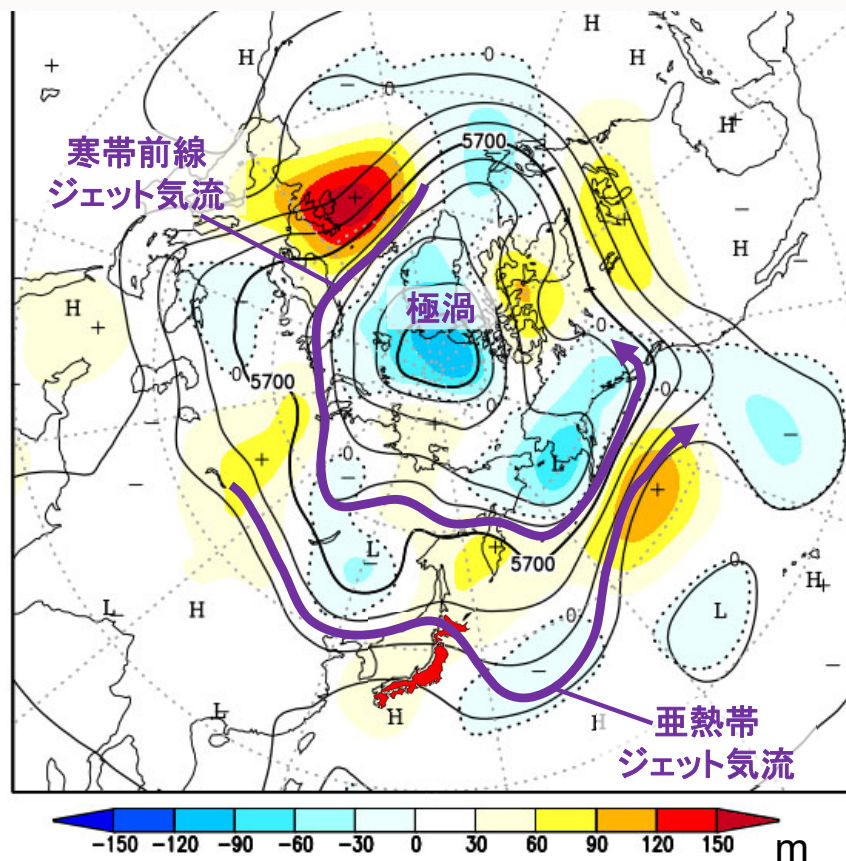
北日本日本海側は低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすかった。一方、本州付近は低気圧や前線の影響を受けにくかった。先島諸島では、台風第9号の影響で大雨となった。

●東日本日本海側、西日本、沖縄・奄美で多照

東日本日本海側は高気圧に覆われやすかった。西日本と沖縄・奄美は太平洋高気圧に覆われやすかった。

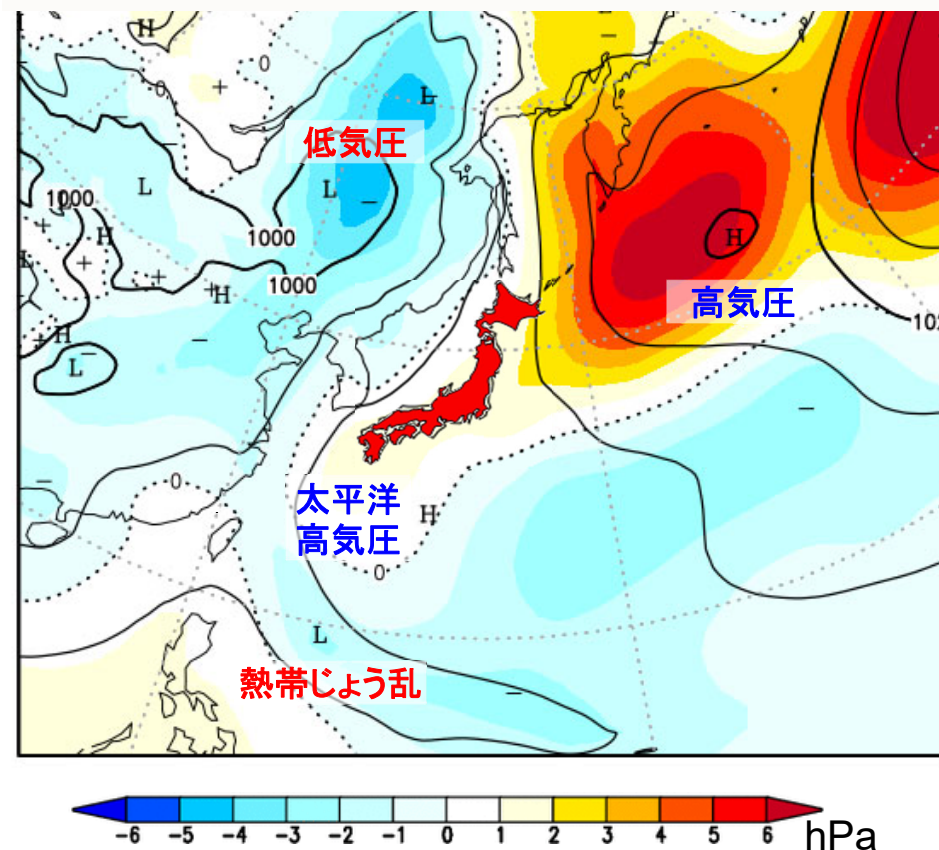
7月（1～19日）の大気の流れの特徴

500hPa高度と平年偏差



亜熱帯ジェット気流は、中国大陸から日本海付近で平年より北寄りに、日本の東で南寄りに流れやすかった。寒帯前線ジェット気流は日本の北を流れやすかった。サハリン付近から西日本付近にはリッジがあり、日本付近は正偏差。北・東・西日本を中心に暖かい空気に覆われやすかった。

海面気圧と平年偏差



東日本を中心に千島の東または日本の東から張り出す高気圧に覆われやすかった。また、西日本と沖縄・奄美は太平洋高気圧に覆われやすかった。一方、北日本を中心に低気圧や高気圧の縁を回って流入する湿った空気の影響を受けやすかった。沖縄の南は負偏差で、沖縄地方を中心に台風第9号の影響を受けやすかった時期があった。